

俳諧
一
家集

四

中村俊定文庫
文庫 18
817
4



1050



俳諧一葉集紀行之部



古亭庵佛為
幻窓 湖中 編
坎窩 久藏 校

四子紀行 又林野
曝地行

本里千松立し流輝を色に三更月正骨句入とひひけん
むの人の杖すすくくく真享甲子秋八月江戸の破屋を
とやうはと風のちりそそるきふけり

秋十とを却て江戸をききり古
以

大冊

昔の山向不二をいふぬ日そやいふま

何りし千里もまげらばはらひそのはらひをいふかゝるもあはれ
心こつてくし侍る當り其運のおしりく侍る朋友に侍る外
此人

保川やまきさきそ不二の河のけぬく 千里

不登川のいさよきゆへに三はけりあはれ侍るの河をいふけり
住ぬ山川のよ流をかけて浮きの波をまよひにゆへに家
とらふはあまの司に控置けん小萩のよの秋の風をいふ
やちのふんあやもき多しんて秋の風をいふ

猿もみ人控置り秋の風をいふ

いふそや母父を惜れくも母もくもわれくも父は母を惜
むしあし母は母をくもむあしし只これたるしては母性此

はらあやもをいふ

大井川をいふくちえ路をいふくちえ

秋のふれ向はくちえゆのねん大井川 千里

ふる上の吟

是のふれ此本輝はくちえくちえ

廿二の月のかすくちえくちえ山の相際いもくちえふる上の吟
歌をこれと数里いふくちえの杜牧、早行の歌いふくちえ
中山のふれをいふくちえ

ふる上の吟

杉葉屋の風、伊勢の山、くちえくちえくちえくちえくちえ
ア是とくちえ玉酒のくちえくちえくちえくちえくちえ
ふる上の吟

長月のはじめに... 神奈川... 峰の松風... 三十一日... あり吉の棟... 女... 子... 宗人の... 青... 松... 竹... 四... 五... 六... 七... 八... 九... 十...

長月のはじめに... 子... 宗人の... 青... 松... 竹... 四... 五... 六... 七... 八... 九... 十...

長月のはじめに... 子... 宗人の... 青... 松... 竹... 四... 五... 六... 七... 八... 九... 十...

長月のはじめに... 子... 宗人の... 青... 松... 竹... 四... 五... 六... 七... 八... 九... 十...

信教のふいふ死の法の花
ひらき芳地のたぐいふかたうらむるやと火山深く白雪
ゆふよまう松南舎を埋る山嶽のたふさしよらひさく西
千本を伐り東よりのき院の後のあひの屋もこもふ
昔より山よ入るきとこまれら人のあはくは詩ののり
あいかたういふやたられ庵山といふ人まもむあや
り信と教をこがして

破折くあやうやとや切らぬ

あ上人のそのたれ法をたぐの院より右の方二丁とくまけ
入はて里人のかたよさのこころのあやうさうき谷を福
らういふきしかめやうの法をたむしよかたうひと尺えこ

くまのあやう

あやうのあやう

あこれ叔素の伯夷のあひをすらん身は許ゆ
昔の身を洗はん山をたむら坂をたむら秋のた既のあふ
あはくあやうと尺えしと先存院のあひをたむら

あ南舎をたむらまのあひ何れあひのあやう

大和より山嶽をたむら世に活き入るあひをたむら
さういふとあやうのあひをたむら伊あやう武をたむら
あひをたむらあひをたむらあひをたむらあひをたむら

義あひをたむらあひをたむらあひをたむら

不破

あひをたむらあひをたむらあひをたむら

垣下白く初ハ木因う家をこまもすむしむし
対峙さし心を平し思ひつ松まけれハ
死せきぬ松のそとハ秋のこれ
葉名布富きし

その牡丹よきよきおほしき
その秋より宿徳をすこむのくま中江のたかおて

あけほのやきし葉白おろし
熱いし指の社殿大く破れ葉地ハあれて雪おろし
かつろりし道を張る小社の法をきししに石をたふ
ては神と名のる葉まのよのすらす生いろうあつし
めしなすしとぶしし

きのかさく枯く餅まやろうれ

名遣屋入りそのはと紙

狂白右ふしは名ハ市を思ひし
その秋大志ししうすしは

おとんすりきし

市人よこのは

松ハく尺

こもさくふむのたの

海もこりり

海もこり野のあしりの白

その学難をよぶがし枝を折る松木をうに手は
考けれハ

そのねぬきし学難をいふ

山あふ年をくぐり

流聲了る岩の響け 餅林の里のこゝ

春の風をよめば

まをれやるやまの山の影のうら

二月末の詠

小舟や水の伝はるのやど

春のうら三好秋風、写流の山を訪

梅林

くは白しきのふや春をよめば

梅の木の花がけりぬすこゝれ

伏見西岸古任口よ人のこゝ

春のうら伏見の梅の葉さよ

大津の町を山道をもくぐり

山道まをりやうやうすれ

竹林

かゝるの竹をよめば

竹の影をよめば

竹の影をよめば

吟行

兼てよめば

水はせせせせ

命あつたの中へ

伊豆の山をよめば

尾張の山をよめば

山崎 けねハ

いささかしく積まらるらん 子枕

以恒多しき言高覺寺の大願わきま 此月のけねハ
は化しぬふしきまにわ言の心地きくまにまのそま
世角よりつるりし

城 志く卯の心をいふ玉あはるるれ

野杜玉

白けしと卯とく膝たかきし卯

二つ山桐奈子のゆき河のくまや身をまよふはたき

牡丹葉深くまけむの増はる我ハ

甲斐の山中のまゆりし

ゆく約れ表すふくまむなうしふ

卯月の素庵に詢し旅の芳とらふ子けに

まをいさるるみそふまき

藤原紀行

海の真室津の海の内入の地

松ヶヶや力なるに五郎中御

と云けん程史のむしりあひしきまはれは秋かゝるの
月又んと思ひきこり付人かゝる信家の士ひり一人
あやま信こゝかすのしりあひきまはれは秋かゝるの
子かゝけ出止る信を厨子かゝる入るるるるるるるる
相がしあゝるるるるるるるるるるるるるるるるるる
獨あゝるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
此のるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
舟のるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
御経のるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

或人のさゝるるるるるるるるるるるるるるるるるる
よるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
野のるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
止るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
あゝるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

と流るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
はを流るるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
はを流るるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
ありるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
お入るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
即ちかゝるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

いとわかれし時 物恋えなむとわかれしと又わかれし
 り歎きまじくはに利根川のほとりあふむとわかれし
 片くづ川よと鮭のゆゑなるまよの心にくらべて武江は
 市にゆきとてものゆくさのほりも千遍あふ入るやまらふ
 ともゆめとわかれしと月夜あふむとわかれしとわかれし
 さしきくはあまのむすしきくはあまのむすしきくはあまの
 藤とてゆめとわかれし根はささきのあまのむすしきくはあまの
 けはらひあふむとわかれしとわかれしとわかれしとわかれし
 人をとてゆめとわかれしとわかれしとわかれしとわかれし
 とわかれしとわかれしとわかれしとわかれしとわかれし
 和尙様とてわかれしとわかれしとわかれしとわかれし
 寺のまきのむねとわかれしとわかれしとわかれしとわかれし

月見するまじくはあまのむすしきくはあまのむすしきくはあまの
 け女とてゆめとわかれしとわかれしとわかれしとわかれし
 不はらひあふむとわかれしとわかれしとわかれしとわかれし

和尙

けはらひあふむとわかれしとわかれしとわかれしとわかれし
 けはらひあふむとわかれしとわかれしとわかれしとわかれし
 けはらひあふむとわかれしとわかれしとわかれしとわかれし
 けはらひあふむとわかれしとわかれしとわかれしとわかれし
 けはらひあふむとわかれしとわかれしとわかれしとわかれし
 けはらひあふむとわかれしとわかれしとわかれしとわかれし
 けはらひあふむとわかれしとわかれしとわかれしとわかれし
 けはらひあふむとわかれしとわかれしとわかれしとわかれし

柳青

ゆゑにや石のおかしの昔のな
縁ありやが 幸しくゆくまのな
宗波
曾良

田家

かろけけ 田圃の都や里の秋
程田うらに赤やとれん里れ有
眺の子や稿すうけく有をこ
言の葉や有か山里れ焼をけ
、 枕青
宗波
枕青

野

もよもや一花すうけ花こる
あゆの秋もすうけゆめくゆる
秋るや一花ハやとさ山の
づ 枕青
曾良
づ 枕青

城をよもす干宿友す
秋をこめらるくわのき
有んといひふのる舟とる
、 枕青
曾良
、 枕青
曾良

貞享丁卯仲秋末五々

卯辰紀行 又稱芳
野紀行

百餘九箇の中は物なりかゝり名付く風評切と云珠う
 今もあゝ風多破とわすれん下は言ふ和所んか狂
 自を遊ぶてくし終り生涯のそつてゝあゝ疾けを
 電く放擲きんて後世のいひの計はすんて人々かよを
 なくく是非拘りたりさうさゝあゝ名を多あゝの言志はく
 名をいへんていへぬもこれら終りさうさゝあゝ走く
 名を更そとさうさゝ人事を思ひて是のあゝ名を多あゝ
 名を多あゝの言志はく一筋ははれり。西行の和名あゝ
 宗祇のまゝあゝあゝける雪舟の繪もあゝける利休もあゝ
 今終りすす。このハ一ありさうさゝあゝ終りあゝける造りあゝ

く伊時を友とす尺くあゝ花をあゝるをさうさゝあゝ
 名を多あゝの言志はくさうさゝあゝ思ひてあゝさうさゝあゝ
 いへんて心花をあゝさうさゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
 名を多あゝの言志はく造化はさうさゝあゝ造化はさうさゝ
 名を多あゝの言志はくあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
 地一。

旅人よ 名を多あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
 名を多あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

名を多あゝの言志はくあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
 名を多あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
 名を多あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
 名を多あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

一、白く、親疎門人おゆ、八付、文書をもと、防の成を
学難の料を色く、巻と尺す、かの二月の料を、砂のち、
一、卷の力を入す、残る、線子、を、その、帽子、志、し、け、や、
物心、に、結、つ、つ、い、く、あ、い、ち、の、者、を、い、く、あ、い、
或、い、小、母、を、く、く、お、あ、り、没、一、多、花、の、海、者、は、く、く、
ゆく、原、を、祝、一、多、花、を、情、を、あ、い、す、つ、マ、ノ、あ、め、人、は
そ、年、一、く、く、と、似、い、く、と、い、と、あ、め、く、く、
その、し、その、り、紙、を、その、の、紀、也、長、の、佛、の、尼、の、文、を、
い、情、を、畫、一、く、く、あ、い、れ、件、似、く、く、い、て、女、禮、物、を、
ら、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
あ、い、れ、り、を、あ、い、れ、り、を、あ、い、れ、り、を、あ、い、れ、り、
物、と、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
あ、い、れ、り、を、あ、い、れ、り、を、あ、い、れ、り、を、あ、い、れ、り、

其、年、蘇、新、の、も、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
お、風、京、口、を、跡、り、山、飯、也、亭、の、昔、一、き、結、と、目、の、跡、
あ、い、れ、り、を、あ、い、れ、り、を、あ、い、れ、り、を、あ、い、れ、り、
先、や、也、其、あ、い、れ、り、を、あ、い、れ、り、を、あ、い、れ、り、
人、の、跡、を、す、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
あ、い、れ、り、を、あ、い、れ、り、を、あ、い、れ、り、を、あ、い、れ、り、

鳥、海、子、と、あ、い、れ、り、
口、の、跡、を、す、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、

我、も、升、雅、亭、云、の、け、の、跡、を、す、く、く、く、く、く、
み、い、れ、り、を、あ、い、れ、り、を、あ、い、れ、り、を、あ、い、れ、り、
も、い、れ、り、を、あ、い、れ、り、を、あ、い、れ、り、を、あ、い、れ、り、
京、や、し、い、ま、る、く、く、く、く、く、く、く、く、
あ、い、れ、り、を、あ、い、れ、り、を、あ、い、れ、り、を、あ、い、れ、り、

先哲人子孫也一の海より遠くはるかに二十五年を又
切し其故より一の海に

會ひぬ二人好しおしむるま

向きの鏡手回の中をたうそらうと海に定す心は
まじりあり

品のもやうさうはるかけり

保良村より行良古崎一里をうへる一三何出の地
清い水もい何なる八海海にまじりぬもくあつあま
そは葉集りといひのたふの中をさへいりてさうりし海崎
うて暮るるも拾ふさうりてさうりてさうりてさうりて
海をさうりて南の海をさうりてさうりてさうりてさうり
たうりてさうりてさうりてさうりてさうりてさうりて

何れもあつ

海にさうりてさうりてさうりてさうりて

熱田伊波屋

磨豆す鏡と鏡と花

海にさうりてさうりてさうりてさうりて

おねねさうりてさうりてさうりてさうりて

何れ人の舎

あつあつつけたるあつあつつけたる

いさゆえんあつあつつけたるあつあつつけたる

故人無り

あつあつつけたるあつあつつけたる

あつあつつけたるあつあつつけたる

たゞし後、及ふ沙是すは、餘り多量、原をわき、旧里に入らば、
旅ね、さく尺、一、か、浮き、の、ね、さ、く、い

素、な、り、う、く、さ、未、ぬ、れ、な、も、さ、ら、水、の、里、さ、く、さ、く、さ、く、木、は、な、
坂、の、ち、り、は、な、新、朝、打、之、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、ね

か、ち、り、さ、く、六、柱、の、き、坂、を、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、
と、物、さ、の、餅、う、さ、出、付、れ、り、跡、に、季、の、初、め、に

た、さ、く、や、箱、の、跡、を、は、く、と、海、飲、取、あ、り、さ、く、さ、く、さ、く、
や、り、手、あ、の、な、跡、を、か、ん、と、海、飲、取、あ、り、さ、く、さ、く、さ、く、

行、く、れ、
ニ、ウ、キ、と、ぬ、く、さ、く、さ、く、さ、く、花、の、ま、

初、ま、
ま、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、

拈、ま、や、師、師、を、ぬ、一、二、寸

は、か、り、河、波、た、く、さ、く、さ、く、信、宗、上、人、の、旧、治、り、護、摩、山、新、大、
佛、寺、と、や、さ、り、な、り、さ、く、さ、く、さ、く、の、か、く、さ、く、さ、く、さ、く、

く、礎、を、跡、一、拈、ま、の、跡、を、回、顧、と、名、の、か、く、さ、く、さ、く、さ、く、
苔、の、み、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、の、一、記、地、さ、く、さ、く、さ、く、

く、上、人、の、跡、新、い、ま、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、代、の、名、
跡、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、

の、中、に、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、
さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、

文、あ、り、師、片、を、さ、く、一、石、の、上、
旅、主、蟬、吟、の、池、さ、く、

さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、
さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、さ、く、

待賢山田

何れ木の花をまゝしつゝあつた
裸のハチマキをまゝにたつた

菩提山

け山は少くもさきよゆえに

龍尚舎

物のつよきをまゝにたつた

彌代民部舎

梅の木をまゝにたつた

学虎舎

芋植をまゝにたつた

津垣のくらし梅一本をまゝにたつた

目かき手あつたは只つた
多良の館のくらし梅一本をまゝにたつた

おのゝりまの舎

津垣やまの舎

やまの舎をまゝにたつた
ひく枝のまゝにたつた
ひく古のまゝにたつた
旅のまゝにたつた
たつたまゝにたつた
まゝにたつた
まゝにたつた
まゝにたつた
まゝにたつた

乾坤無住同行二人

すし ぬき 横尺きりり 柱木三
すし ぬき 糸も尺きりり 柱木三 万葉丸
旅の具おぼろひさのさきりり けいりり 物入れりり けいりり
けいりり けいりり けいりり けいりり 物入れりり けいりり
物入れりり けいりり けいりり けいりり 物入れりり けいりり
さきりり けいりり けいりり けいりり 物入れりり けいりり
さきりり けいりり けいりり けいりり 物入れりり けいりり

さきりり けいりり けいりり けいりり 物入れりり けいりり
さきりり けいりり けいりり けいりり 物入れりり けいりり
さきりり けいりり けいりり けいりり 物入れりり けいりり
さきりり けいりり けいりり けいりり 物入れりり けいりり

けいりり けいりり けいりり けいりり 物入れりり けいりり
さきりり けいりり けいりり けいりり 物入れりり けいりり
さきりり けいりり けいりり けいりり 物入れりり けいりり
さきりり けいりり けいりり けいりり 物入れりり けいりり

三福 武峰 福峰 武峰 武峰 武峰

けいりり けいりり けいりり けいりり 物入れりり けいりり
さきりり けいりり けいりり けいりり 物入れりり けいりり
さきりり けいりり けいりり けいりり 物入れりり けいりり
さきりり けいりり けいりり けいりり 物入れりり けいりり

けいりり けいりり けいりり けいりり 物入れりり けいりり
さきりり けいりり けいりり けいりり 物入れりり けいりり
さきりり けいりり けいりり けいりり 物入れりり けいりり
さきりり けいりり けいりり けいりり 物入れりり けいりり

さきりり けいりり けいりり けいりり 物入れりり けいりり
さきりり けいりり けいりり けいりり 物入れりり けいりり
さきりり けいりり けいりり けいりり 物入れりり けいりり
さきりり けいりり けいりり けいりり 物入れりり けいりり

又て風雅の人の出づる所なりしに
古めくかたきとていかに
つとてかたきとていかに
中を指し泥中なること
人々かたきとていかに

更衣

いよの役さうらう
一舟わく布子とて
浄佛のハをさうらう
さ此れおのれ

浄仏のハをさうらう

板橋寺浄土和尚本願の対船中
七十餘年の影をさうらう

浄土のハをさうらう
その影さうらう
旧友さうらう

その影さうらう

大坂さうらう

其子さうらう

次子

月尺さうらう

浄土のハをさうらう
浄土のハをさうらう
浄土のハをさうらう
浄土のハをさうらう

まの種をいりりみあひて漁人の將らまはけの死のた
えしつるんま

海士のうねまのいりりやけーの志

東は才西は才の宿は才とて才とてこれとてあふらうの
すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
たをり干ちりりりりりりりりりりりりりりりりりり
みゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
古戦防の御徳もとてあはれりりりりりりりりりりり
深くも浅くもあはれりりりりりりりりりりりりりりり
ひきすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

あふゆりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
岩根をくひのちれはすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
けゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
門をいりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

浪士の海士のうねまのいりりやけーの志
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

四方はしるすもあつたふとの海とわすれず赤心道の性もこころ
めしつる所海をひらきまゝにさすにきくはたの海もた
るゝとる 呉楚東南のふりたをひらきとるや物とる人の
足はてふかきしりのけいひも思ひあきしつとるゝ又りり
は方とつて海をひらきつるかきしりのけいひも思ひあきしつ
尾上つてき丹波海かきしりのけいひも思ひあきしつとるゝ
るゝききまのてつる後掛松より足つとるゝの谷内裡屋一ま
用のつとるゝ足つて代のみこれとつたのさきふたれつとるゝ
うのけいひも思ひあきしりのけいひも思ひあきしつとるゝ
女流の海も思ひあきしりのけいひも思ひあきしつとるゝ
りつとるゝ内付局女孀曹子のにこれとつたのさきふたれつ
あつとるゝのけいひも思ひあきしりのけいひも思ひあきしつ
船中つとるゝ

入世海はこゝろれつとるゝのけいひも思ひあきしつとるゝ
は控子とつとるゝのけいひも思ひあきしつとるゝ
とつとるゝのけいひも思ひあきしつとるゝ

更科紀行

さうしらの里曉野山の月入りし志きりばそあち秋風。
 四季更科さうしらの里の情を狂ふもめ又たしつ越人
 とこ木吾流ハ山深くささきしつ旅あのかんららぬ
 初子工の奴僕をくせつしあつてふらきし書きしつこ
 もも野路のしりしあつてふらきし書きしつこ
 志きりばそあち秋風。さうしらの里の情を狂ふもめ
 又たしつ越人。とこ木吾流ハ山深くささきしつ旅
 あのかんららぬ。初子工の奴僕をくせつしあつて
 ふうらきし書きしつこもも野路のしりしあつて
 ふうらきし書きしつこもも野路のしりしあつて
 ふうらきし書きしつこもも野路のしりしあつて
 ふうらきし書きしつこもも野路のしりしあつて

さうしらの里曉野山の月入りし志きりばそあち秋風。
 四季更科さうしらの里の情を狂ふもめ又たしつ越人
 とこ木吾流ハ山深くささきしつ旅あのかんららぬ
 初子工の奴僕をくせつしあつてふらきし書きしつこ
 もも野路のしりしあつてふらきし書きしつこ
 志きりばそあち秋風。さうしらの里の情を狂ふもめ
 又たしつ越人。とこ木吾流ハ山深くささきしつ旅
 あのかんららぬ。初子工の奴僕をくせつしあつて
 ふうらきし書きしつこもも野路のしりしあつて
 ふうらきし書きしつこもも野路のしりしあつて
 ふうらきし書きしつこもも野路のしりしあつて
 ふうらきし書きしつこもも野路のしりしあつて

みづきみく大根かきし秋の風
木石の縁うき世の人北ち度うま
遠くまでのおうりはるる木石の秋

善光寺

十日新中田門白雲も只らうり
吹流するる海百は世ふりれ

おくのわろを

月りる百代の過客うりゆかふ事と又旅人を舟一
生涯をうりるのほくうり先をゆくものなり旅
旅をすうりる古人をねほく旅を飛をりる事と
舟より行やの風をきりりれる便伯の心やよは
さすうりる七年の秋に止れ破屋の古事と
とられちるる世のやうきり川の岸うりる
物うりつちて心をとるるを祖神のまひ
ふりつちて心をとるるを祖神のまひ
すうりる松島の月かりの心と
風うりる松島の月かりの心と

雪の戸も任ぢる代了ひのわろ

向八分を鹿の様子に置き置やふも事非ざるめりのおぼし
と一二月にふくまひし史くもさかぬるものつる不二のさしあかす
らやとて上野倉中の花の梢まじりぬるものさるをさしあひ
すしきかあはるの青より清くひら、舟子たりてさるをさしあひ
らまらし舟をぬれハあまきさる里のさしあひ納すさるをさしあひ
たさしに船あひの涙をさしあひ

ゆきまきやる船一魚れ月をさる

これをもさるをさしあひぬとてゆきまきすしあひ人ハさ
中々さるをさしあひぬけの足ゆきまきすしあひぬきまきすしあひぬ
とて一え深しとてさるや其羽長をさるゆきまきすしあひぬきまきすしあひぬ
まきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬ
まきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬ

まとりけきを白洲早かきさかすしあひぬきまきすしあひぬ
うれた物先共、むらさきすしあひぬきまきすしあひぬ
よりのけきゆきまきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬ
まきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬ
まきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬ

まきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬ
まきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬ
まきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬ
まきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬ
まきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬ

まきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬ
まきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬ
まきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬ
まきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬ
まきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬきまきすしあひぬ

おのゝ休しむるにふくまふ併の得妻をさし示現して約る
 葉門の乞食唯礼してふの人をたふしりやうやとありしのおす
 り。心をとくあてんく品を習得分あうして正直備固た
 るもの。到毅本朝の仁平らうふもくひ守稟の信望むる
 也。

お月影のゆかり消ぬすは昔はゆしを二葉山とせしを
 古海大砂置甚の時日光とありて久まふ宗本未もさう
 りやうの冷けゆきう一らうやふく思ほ八葉子ゆれ曰氏
 安流の杯おしやうしげくくおわくくそまをさしやふぬ
 ありふやま成ふこの成は日め光く

思致山ハなましくりておひさしにさう

利持く思致山とすころと

曾父

曾良ハ何合やうして思致山とす。道進の二葉山將もふく
 予は新水の男をたふしりてゆかり松島を流のふくたふく
 して浅根の且ハ新松り新をゆきうへく松立峻勢を利く
 思致山とす。思致山とす。思致山とす。思致山とす。思致山とす。
 山のりありて思致山とす。思致山とす。思致山とす。思致山とす。

二十餘丁山をのりて思致山とす。思致山とす。思致山とす。思致山とす。
 岩の壁を攀りて思致山とす。思致山とす。思致山とす。思致山とす。
 思致山とす。思致山とす。思致山とす。思致山とす。思致山とす。

思致山とす。思致山とす。思致山とす。思致山とす。思致山とす。
 思致山とす。思致山とす。思致山とす。思致山とす。思致山とす。
 思致山とす。思致山とす。思致山とす。思致山とす。思致山とす。
 思致山とす。思致山とす。思致山とす。思致山とす。思致山とす。

身を山にたかくゆけきこし言そえとて松敷くろく昔志
こゝろや卯月かたを和さや十奈たる木枝を懐く山間八
さしみのゆえいひくのほいふやと好の字よらのむれは石上は
小石若産と産いけしう好縁ゆの死算はやけゆの石をま
尺くさく

木塚く危を破くいへる本立

と云ひぬ一句を柱す跡、ゆるしうれはう殺生石すゆく
徳代よしきく運つる才口付のものをと運冊えをよとて
やきまきとて定むゆるものそかへ

跡も横り了らしむけよほしん

殺生石を湯泉かゆり山けらめし石の毒毒のやんむい
障障のたぐひま妙のまねてぬほしかさあり死す又後

もあういけ木枝ハ芦神の里をゆりく回の畔に跡り此雲一歌
か戸歌某の河柳尺をくや外ももくしこのさかひ木か
ゆりくはほくくやと夢ひいさをまは柳のうけくくた
よのゆりつれ

回一板植すくらきある柳らま

心許多く多あるかきぬをうにきく川の岸にかうて松かさ
まらぬいしおくをむらうの中いんてしゆらうし中
舞の三園の二一して風語の人をこもむ社風を耳す跡し
紅糸つを休りく青糸の指花ゆれあり卯のむかひ助
最花は咲きひてをきくさゆり心代をさう古人村をこ正し
衣枝をくゆりくかうしこれと清物の字をまもるまを
このちをかへし舞のまくれをいれ 骨良

はふ首をハ石の向いなる山にたむけしむるを

お世帯いゝのまゝやあゝのまゝ

月夜梅のこゝろをこゝろの池の上をさながらあつた夜は月日。
四法一石の山際一里半をこゝろにありし故塚の里鯖野とみり
多うわしゆゝ丸をこゝろにありし是夜月日四法こ
替り大石の法を人のまゝにゆゝまゝをこゝろをこゝろに又
かこゝろに古方と一家の石碑を跡に中をこゝろに二人の跡をこゝろ
し先物とれあり女たれもかひしき名のをまゝにけり
ものつれと使をぬいし男睡涙の石碑もまゝにありし
寺より入るまゝをこゝろに義経の古刀并まゝの笈をこゝろ
めし什物とこゝろ

及も古刀を古刀にこゝろにこれ誠哉

二月朝日の下く女奴故塚に泊る温泉の山にたむけしむるを
かこゝろに古刀をこゝろにまゝにゆゝまゝをこゝろに又
いらりの火をけりし古刀をこゝろにまゝにゆゝまゝをこゝろに又
まゝにゆゝまゝをこゝろにまゝにゆゝまゝをこゝろに又
お病をこゝろにまゝにゆゝまゝをこゝろに又
又旅をぬれりし古刀をこゝろにまゝにゆゝまゝをこゝろに又
まゝにゆゝまゝをこゝろにまゝにゆゝまゝをこゝろに又
旅をこゝろにまゝにゆゝまゝをこゝろに又
とまゝにゆゝまゝをこゝろにまゝにゆゝまゝをこゝろに又
徳州の白石の塚をこゝろにまゝにゆゝまゝをこゝろに又
つゝの山にありし古刀をこゝろにまゝにゆゝまゝをこゝろに又
陣の里をこゝろにまゝにゆゝまゝをこゝろに又

めりたを子足り注さんんんんらゆの流

かの魚田をまごとしておとつゆけの好ぶるその山陰十符の
 廿二のつとまを十符の若菜と佃をまごの流として

高碑 市川村の覚球

信名の石のみみすと古尺跡横三たるころつ若もや穿て文字か
 すころの四維國界の敷里を記し此城神龜元年 據察使結
 守府將軍大野釣兵衛東人の所置や天平宮字六年冬 儀
 東海在山節度使結守府將軍直美釣兵衛朝鶴公造也十
 二月一日とて覺武皇太子御時をあたへ昔よりしみあけ
 耶麻おたくかへ傳ひていとも山崩丸川着て是ゆに
 石を埋へ去りかた本をまをわう本こそこれに對して 式変
 一と其流にいたるおぬののこをくらんをひし物にまをま

たかみ今眼前の古人の心を定めて卯卯の一體存命の心
 罷旅の芳をこまをれへんさるるこころ

それより神田の玉川沖の石をまぬ末の松山を寺を造りて
 末松のまを松の石として記さるるしとしてかへて枝をついで
 花の末を松の石として記さるるしとしてかへて枝をついで
 海へ入るの終をまをまの心をわらさるるしとしてかへて枝をついで
 うらへんはつとまを記さるるしとしてかへて枝をついで
 こころのまを記さるるしとしてかへて枝をついで
 むのまを記さるるしとしてかへて枝をついで
 しものまを記さるるしとしてかへて枝をついで
 子ららけけ枕あつてかへて枝をついで
 風をまを記さるるしとしてかへて枝をついで

寺の御堂を造りてむすむをいひて二階を造りて
此中の御堂より一丁の御堂へおかしめをいひて
松島や松島寺ありていれはくまき 曾良
予ハもて可く賜ふんといひていれはくまきをいひて
対馬島に松島島の清海寺原事道松うらまの和島をい
らうらまをいれりていひの及てす且松島清海寺あり
十一日瑞岩寺の清海寺三十二寺のむし一寺の平田即ち
一寺入唐功徳の好海寺ありていれはくまきをいひて
依りて七重の蓮花のいれりていれはくまきをいひて
去成徳の大徳寺といれりていれはくまきをいひて
とていれりて
十二日平和泉といれりていれはくまきをいひて
橋などいれり

侍人治中れと新免葛葉のいれりていれりて
路をいれりていれりていれりていれりて
とていれりていれりていれりていれりて
船入はくまきをいれりていれりていれりて
つはくまきをいれりていれりていれりて
すれりていれりていれりていれりて
のいれりていれりていれりていれりて
るいれりていれりていれりていれりて
いれりていれりていれりていれりて
二十日里いれりていれりて
三代の景耀一階の中より一丁の大門の松島二里ありていれり
御り松島田野より来りて新山のいれりていれりていれり

のちれハ北山ありあけし大河ハ衣川ハ和泉珠をめぐ
てて言智のこころ大河ハ若入康徳ホウ四法ハ衣の并を隔る
南の山をさしうりく免夷を防くとも尺いしきく義言すく
きく此城を籠り功名一時の事わくくめく國破れく山河あり
珠着りして草まきくくくく三打あつて計のうつくさく海を
看しはるぬ

なまや作くものともく言のゆと

うの志りまかたゆつ白毛りれ 曾良

かわけ耳勢りく三本三帳す煙きく三将の像を飾り
光きく三代の楯を破れ三本の佛く安置す七言あふくを
く珠の尻風く破れ雪の柱おろす朽く既く教度く花
の葉くぬくくを四面めくくかみく草履をく履く風向

このく世母まふ本の記念くあめり

さみくぬれ海 跡りてや光 豊

まゆねをくくく足やくく若きの里子泊く小尾谷くくの小島
まこくあるこの湯くく尿おの并くくくくく出羽ありくく
くく此法秘人まぬあく雲なれハ海をくくや ぬくもくく
かきく并をくく大山をのりくく日既く言けくハ射人の衣
を又くけく食くくくくく風おゆれくくく 風火山并く 運高

習きくくみくく尿すく 松もと

ゆくくくこれより出羽あり大山を隔るはさくくくくくハ
そくく人の人をたのいしきくくくくくくくくく人そ
ものくゆれハ究竟の若もの及願差を横くく楯の杖を携て
秀くく先くくくくくくくくくくくくくくくくくく

かゝる山にありては... 尾花... 志... 九... 涼... 心...
かゝる山にありては... 尾花... 志... 九... 涼... 心...
かゝる山にありては... 尾花... 志... 九... 涼... 心...

尾花... 志... 九... 涼... 心...
尾花... 志... 九... 涼... 心...
尾花... 志... 九... 涼... 心...

眉掃を伴う紅粉の花

禁錮すゝ人ハ古代カすゝこれ 曾良

山秋... 禁錮... 眉掃... 紅粉...
山秋... 禁錮... 眉掃... 紅粉...
山秋... 禁錮... 眉掃... 紅粉...

走りては若き入標の姿

走りては若き入標の姿... 古大...
走りては若き入標の姿... 古大...
走りては若き入標の姿... 古大...

八月廿二日 本路志見方より引く山宮冠と記をつけてみ
 強力と云ふものこそゆれこむ方山宮の中へ氷をこき踏
 やつて八里更なる月行道のや寄る入るのや一とされ
 息絶方へ入る頂上へ轉り北風はく月ありつゝ世を
 海へ流しこく階のめを待たせておの消れ八海海
 谷のわくくりに銀冷小原と云ふは山宮の極冷靈水をこき
 下るに際齊くく剣をこくつ流る月山と記をきりて
 寺へ登りこくかの就泉と剣を海とくや干得莫耶れ
 寺をこきこく是を堪能の執持とぬとくくはる是を後
 けりてはけりゆれこむに三尺とくくはる極のけりこむ
 ひくくはる降後寺のこくはるこくはるこくはる如き極の
 花のこくはるは 炎天の極のけりこくはるこくはる
 行号信

山のふか海をこくはるこくはるこくはる受由地而
 山中の極細行者の法式とくくはるこくはるこくはる
 寺をこくはるこくはる

坊の極れ八海宮の需を依る三山此礼のりく經冊とす

海 山 かの三々月日
 寺の峰 いんらつれて月の山
 かこはぬ海屋をぬす紋くれ
 海屋山 踏ふむそはふこくはる 曾良
 町定こくはるこくはる城に山も重行とくはるこくはる
 却てこくはる他法一をこくはるた吉のけりこくはる
 酒田のみはこくはる湖底不取くはる醫師の海へこくはる
 海いこくはるか吹海うけてみすしみ

君より雅好の事も聞く

故にこのぬれぬる所もわみまはるは家 曾良
酒田の多跡りをもなねる小陸のさのやうに定むるに思ひ
物といふべからず夫が加賀の府より百三千里の道の
とこの御色ハ故の地をゆめをもつてかへりて中玉一
が家、玉にけりるは若濕の里方に神をまやまし病者
をりも記さず

又月やうらむと夢の枕にハ似り

何の海や休渡り橋よ天何

りハ親しくいふ子ハ大もる物にハ似りハ似りハ似りハ似り
影もくくつれ侍ハ枕引もておくる一宵隔
向の方こそは女のやうに人々もつてゆめゆめわづらひ

これあつても父の物汗ももきけハ残存も新汗もも和
の遊女ありし侍老老言すもいふ武蔵守しをもこの道で
向すハ古のやうに又きくめははらぬふし侍外も志や
ありしつづと故のよする侍とあつてりハ月の子は世を
あきらむるもつらりてさるめぬおとくハ此業困りのや
侍ハおともいふをもみしら物入る侍と旅立ち香
子ハかうひきゆき思はぬ旅侍のうき思はぬ又も水もた
しく侍れハ尺ハくつれも侍治を志ハ侍人衣のく
御侍ハ大恩のめくもいふと縁縁をませきと侍
若く不便のよも侍れももらへハ侍しよと侍
おのりハ人のぬくにたもてゆきハ侍ゆのか護死つ
らうと侍を侍もつては侍はくやなきうらひし

一 女子遊女とぬく〜秋の月

曾良よかれハキ〜女侍〜る廻四十八〜瀬〜うやぬ〜
ぬ川〜〜〜〜〜船古〜と〜海子〜お摺籠の〜浪ハ〜春〜ふ〜
〜も初秋の〜云〜と〜ふ〜の〜を〜と〜人〜子〜あ〜れ〜ハ〜れ〜う〜
五里
〜つ〜ひ〜〜む〜ふの山麓〜入〜山〜の〜谷〜に〜お〜か〜す〜う〜け〜ハ
〜せ〜ひ〜一〜枝の〜あり〜す〜し〜の〜ゆ〜き〜し〜い〜ひ〜れ〜と〜れ〜く〜が〜架〜せ〜入
〜き〜の〜ま〜や〜を〜け〜入〜あり〜る〜縁〜海

卯の志山〜〜〜が〜る〜管〜と〜〜〜〜と〜昔〜ハ〜七月中の〜五里〜
大坂〜う〜が〜ふ〜音人〜何〜や〜〜と〜の〜ゆ〜く〜を〜れ〜旅〜宿〜を〜修〜す〜
一〜宿〜〜と〜の〜ひ〜は〜を〜す〜け〜る〜若〜の〜け〜の〜し〜ゆ〜と〜女〜知〜人〜文〜侍
〜に〜生〜重の〜為〜早世〜〜〜と〜〜〜〜女見追善を〜修〜す〜
塚〜も〜勤〜け〜糸〜匠〜後〜ハ〜ゆ〜ふ〜の〜の〜と

ゆ〜も〜庵よ〜い〜と〜あ〜れ〜

秋す〜し〜ま〜〜と〜に〜あ〜け〜や〜瓜〜蒞〜

色中金

あ〜く〜と〜り〜ん 難〜向〜く 秋〜お 風

小松〜と〜雲〜と〜

志〜保〜〜〜〜〜は〜あ〜や〜小松〜以〜秋 芒

此〜も〜左〜田の〜神社〜千〜滴〜寧〜善の〜甲〜務の〜き〜れ〜何〜つ〜埋〜方〜源〜が〜
属〜也〜 此〜義〜約〜と〜〜〜に〜ん〜ら〜を〜ま〜や〜ら〜や〜け〜と〜平〜吉〜の〜
子〜何〜ふ〜け〜同〜底〜と〜吹〜く〜 一〜か〜し〜菊〜か〜し〜子〜の〜け〜う〜の〜葉〜と〜ら
〜と〜く〜免〜就〜法〜子〜琳〜形〜お〜〜と〜言〜基〜討〜死の〜存〜末〜身〜義〜仲〜乳〜状
子〜と〜く〜は〜社〜と〜免〜と〜は〜け〜一〜植〜々〜次〜郎〜の〜使〜と〜一〜ゆ〜と〜
の〜あ〜〜と〜強〜記〜す〜ん〜と〜

41

四十

ちんやれかふらのみきりし

山中の温泉にゆくほどきりね森法に又新とゆゆふ左の
山隈に親ききりし山は空三十三所の山礼子ききりし
任大慈大悲の像を安置しあひらけ給ふとあけしや
谷組の二重とこら付しあひらけ給ふとあけしや
昔とてこの水きりの上りきりしあひらけ給ふとあけし

石山は石よりきりし 秋の風

温泉に温泉の母とてきりしあひらけ給ふとあけし

山中や菊のよききりしあひらけ給ふとあけし

あひらけ給ふとあけしあひらけ給ふとあけし
あひらけ給ふとあけしあひらけ給ふとあけし
あひらけ給ふとあけしあひらけ給ふとあけし
あひらけ給ふとあけしあひらけ給ふとあけし
あひらけ給ふとあけしあひらけ給ふとあけし

一村お洞の軒を請ふとあひらけ給ふとあけし

曾良は後を病む侍替ふ長を病むとあひらけ給ふとあけし

ゆきしきりしあひらけ給ふとあけし 曾良

あひらけ給ふとあけしあひらけ給ふとあけし

あひらけ給ふとあけしあひらけ給ふとあけし

あひらけ給ふとあけしあひらけ給ふとあけし

大聖の塚か合昌寺とあひらけ給ふとあけし

あひらけ給ふとあけしあひらけ給ふとあけし

秋の風 秋の風 やりしあひらけ給ふとあけし

あひらけ給ふとあけしあひらけ給ふとあけし
あひらけ給ふとあけしあひらけ給ふとあけし
あひらけ給ふとあけしあひらけ給ふとあけし
あひらけ給ふとあけしあひらけ給ふとあけし
あひらけ給ふとあけしあひらけ給ふとあけし

じ

四十一

停るも残魂をうえ陽のまをさしわひ来り打音庭中お
放られん

庭掃るやうや寺子らう 柳

長妙のぬき片に子難ありうき控の積赤の境吉崎の入口
を舟棹さして以越の松を尋ねぬ

ねすうらうねり 波をよこさう

なをとれんやう 松 西行

けこそし原京者うらう一辨もかたうこの公常用の指
をきうとく

丸茶房新寺の長老古ふ因りれはあぬ又兼河の少枝の
もの徳神子尺送くけまをしきふの来り雲くの風京さ
うううのひつりけうおそくゆめれあふ化文れいあゆみ既

うらうとく

物とく扇引さく好侍の丸

又十下山入て水平を礼す是久保河の海寺に邦操を里を
廻てかとう山けは徳をあふし貴ふんううや福井を
三里けうはれは飯志とめてやうはるのそをうに
うに等哉いさあはは士あうらうの年まははるあうそを
あぬおすうははういさあははひてゆもや將死う
えや人さあお付れはまに存念うそそをうとをう海市中に
そを引入てあやふふ家さうふ系瓜のそをうのうけははは
きうにたれうもははさういさあははうらう門をうけはは
けぬ女の物うらうわうあまそはの海折やあうははは
ア何うとくあまのうはははうらううらうあははあ

千々其のくちしき我をよきとくもくちを防う路通を
 けみりよきしむむいひくみの玉のけり物にすけし
 ぬく大垣の家入ハ骨良も作あうし本ありぬ越人をも
 飛さく如竹の家入集つお川子荆れ父子をふきしき人
 人ハ秋訪ひく蘇生もの手ぬきしとく且候い且し
 松の物しとてききとせらるる長月ありしれハ侍を此近
 空おんと又舟うけし

吟

あさみ子

これれは秋了

佛指一葉集文々部

古学庵佛号 編
 幻窓湖中
 坎窩久藏 投

菊也並種

菊んも散らさく天竹のむ水たのむれ牡丹を紅白の是非
 何して五葉をけりさるる秋のむもあつしはのききうりさき
 花咲けりしれゆきも極もい候しとて時世並一もい候
 極風去と置つてらるるゆか多ひをんぬ株せきもすも女
 花うらさきりて庭をさく丸きり折端をかきしけりし
 人呼く草院の庭をさく向友門人ともい候しとて芽もさく相
 らるるさきりて庭をさく丸きり折端をかきしけりし

みるはくより柳をひきこきとて後既す彼れんすれハ
 かれはまうたの露の地をふくつてあつちるふ人しとちのねを
 ひ風のからひれんてしとちのみあふこはれぬや華か
 すきひよのまぢかちれひしにありあつたや。まぢか
 島のむのけにあり人しとちのねをひきこきとて後既す
 らひしとちのねをひきこきとて後既すこふとちのねを
 ひきこきとて後既すこふとちのねをひきこきとて後既す
 さうとちのねをひきこきとて後既すこふとちのねを
 ひきこきとて後既すこふとちのねをひきこきとて後既す
 秋の程にききける割れ 竹の枝折戸やさうとちのねを
 下はつしとちのねをひきこきとて後既すこふとちのねを
 代ハ不二子かちと宋門をすて是とちのねをひきこきとて後既す

三すこの後よかちとて後既すこふとちのねをひきこきとて後既す
 けのうらむとちのねをひきこきとて後既すこふとちのねを
 し先せとちのねをひきこきとて後既すこふとちのねを
 或ハ半吹とちのねをひきこきとて後既すこふとちのねを
 とうけし 牙にみし花吹とちのねをひきこきとて後既す
 も谷とちのねをひきこきとて後既すこふとちのねを
 傍橋まはとちのねをひきこきとて後既すこふとちのねを
 とはとちのねをひきこきとて後既すこふとちのねを
 びとちのねをひきこきとて後既すこふとちのねを

宋門 雜一 竹をふくし叶の又く

七すの秋かちとちのねをひきこきとて後既すこふとちのねを

藤子とさみきうけのしるし捨ていもさかひ若
堂のくろくも相おのりもさかひ風子ひくく
以人のちえうもあつてい

枝の花のころも似よ木石の松
しき人れ松くもあつて木石の松

海にあらうしよは決定すいふしよもあつてい
かこみか二ふくもあつてい

送信専吟集

杖張子字能もいけこまのしるし捨ていもさかひ若
幸やうのほしめ信ちけ武江の東原川の字能もいけ
既く一歩もいけいもあつてい

越え幸し斗鼓り御の身もあつてい 又作あ能也
諸人としもあつてい
中の中もあつてい
うれもあつてい
かのしもあつてい
まのあつてい
上もあつてい
朝の毛れくるもあつてい

既守賦

至月の時無もあつてい

鳥賦

一鳥小大ありて居るも其まよふ小も鳥鶴といひ大も以角た
とよひけり及哺の若も僕一と多中の骨子とけり成ハ
人たあゆく人をつけ記河に翅をあらへて二星の蝶と
はれり成大事のやうくをわけてまゐるをさへていふも
らふもいふもいふもあひあひのあつてもあひあひのあつても
ゆくたへて詩歌の才まも情のこころいふもいふもいふも
かゝらるもやうに只食料の中よりいふもいふもいふも又油と死を
うそふつれをいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
性倚強急なりて終りの翅をあらへていふもいふもいふもいふも
をおそれぬ肉は油の味をぬくあつてもいふもいふもいふもいふも

帝対を人不可の言を抱くもいふもいふもいふもいふも
むらふ里をいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
を替へていふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
のみ也の翅をあらへていふもいふもいふもいふもいふも
て強きいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
すもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
さうゆえにいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
はれり人をつけりていふもいふもいふもいふもいふもいふも
も甚しきいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
三足り全鳥の死をあらへていふもいふもいふもいふも

笠張説

情をいふは... 人生七十を過ぎぬと... 二十餘年... 年六十... 是れは是非... 南無... 人未だ... 一... 友...

友と... 禁戒... 新くもや...

尾陽蓬左...

尾陽蓬左... 尾陽蓬左... 尾陽蓬左... 尾陽蓬左...

くまにんしつてひめゆりのたうしつりかき登の大たうんれ
れくやまのまをすくひんぞ世のちかきくんとんげの
系れゆきとんちあへん

銀河序

お産をとり御と致は不おもく鳴いひあふとんつかの
作渡りも申れ海の向十八里餘波を隔て東西二十五里の
横をうすしつづの嶮難年のらんしやしきすくとも
とんくうつらやとんてんむいふ申れ言をばはく
かしてあはれく昔のころつとんれハかきうあふめし然も
つづくと大花新敷のらんを休きうとんくのみおま
しき石のまへあふおまふのらんつとん行ひよて

昔時の秘結とんてんてんてんてんてんてんてんてん
うく知海はたつとんてんてんてんてんてんてんてん
つづのまきとんてんてんてんてんてんてんてん
きれしとんてんてんてんてんてんてんてん
彼ゆかへんてんてんてんてんてんてんてん

海や作渡り精とんてん川

仔細記の跋

妙きその花とんてんてんてんてんてんてんてん
れしれつとんてんてんてんてんてんてんてん
つづひぬきとんてん向井氏吉来のぬつとんてん
海のくまをかつとんてんてんてんてんてんてん

水の海はまゝ深き水に流るる一掬も百川の味を
まねて流るる一木の枝の影もいづれは影あり深き白
川の秋風より風の涼きあつたをよみて流るるのあをた
あつたをよみて流るる影もいづれは影あり深き白
おころしよとて流るる影もいづれは影あり深き白
そころしよとて流るる影もいづれは影あり深き白
よれりて流るる影もいづれは影あり深き白

西の風はあつたをよみて流るる影もいづれは影あり深き白

義虫跋

その声はきこえぬ物もいづれは影あり深き白
一白をいづれは影あり深き白

又言ふていづれは影あり深き白
その声はきこえぬ物もいづれは影あり深き白
一白をいづれは影あり深き白
その声はきこえぬ物もいづれは影あり深き白
一白をいづれは影あり深き白
その声はきこえぬ物もいづれは影あり深き白
一白をいづれは影あり深き白
その声はきこえぬ物もいづれは影あり深き白
一白をいづれは影あり深き白
その声はきこえぬ物もいづれは影あり深き白
一白をいづれは影あり深き白
その声はきこえぬ物もいづれは影あり深き白
一白をいづれは影あり深き白
その声はきこえぬ物もいづれは影あり深き白
一白をいづれは影あり深き白
その声はきこえぬ物もいづれは影あり深き白
一白をいづれは影あり深き白

再いこれこそをまけの世にあらすれは秋の風をよ
くしきし一程の雲をよとあすの暮をよしついでに
むの夕の風をあつたる

虚栗集跋

栗のよよ一葉其味何なり

李杜の心酒をよめて真山は粥をすくこぬよりのよ
其句々々々々はくくくくくくくくくくくくくくく
徒に風物のその生^ッりゆめあをるりの山かきよる人の
ひらひらぬ虚栗わ
急の情つ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
小窓の上陽人の筆の中より衣裾のきよのからゆきし

下の赤ま眉こころ親まの娘娶姑のけふあつたを
ゆりゆり寺の火氣ある若者の情をもとに白氏を
後をよつ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
其語震動をよるをよるをよるの鼎の句を煉て就
泉と文字をよるは花柳のわらわらわらわらわらわら
ほのぬきひを待

閑居箴

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
もかきし〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
おの寂のゆりゆりの友をよるゆりゆりゆりゆり
そくゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

おしめけをききあふれ又もききあふれしやまをききあふれしやま
そよつめがゆきゆきゆきのあつち

海の色はいつもいつもあつちゆきのあつち

自得歳

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆき

あつちゆきのあつちゆきのあつちゆきのあつち

批銘

あつちゆきのあつちゆきのあつちゆきのあつちゆきのあつち
あつちゆきのあつちゆきのあつちゆきのあつちゆきのあつち
あつちゆきのあつちゆきのあつちゆきのあつちゆきのあつち

あつちゆきのあつちゆきのあつちゆきのあつちゆきのあつち
あつちゆきのあつちゆきのあつちゆきのあつちゆきのあつち
あつちゆきのあつちゆきのあつちゆきのあつちゆきのあつち
あつちゆきのあつちゆきのあつちゆきのあつちゆきのあつち

あつちゆきのあつちゆきのあつちゆきのあつち

度右銘

あつちゆきのあつちゆきのあつちゆきのあつちゆきのあつち

あつち

あつちゆきのあつちゆきのあつちゆきのあつち

弧之銘

あつち

一 孤重黛山 自笑梅箕山
 莫懷首陽餓 這中飯顆山

敵公のたふはるをさるがふみまゆふのあつとふはつて
 ありてあつてつづのいふこも是をたつてみずつて花
 入る意をさへたれはたつてこのつづのあつてさへ
 つづて海をもふたれはたつてあつてあつてあつて
 夢院のいふ一不釋入つてあつてあつてあつてあつて
 心あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 一むせとあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 一あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 李白のあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

きつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 是一あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 物あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

極古篇

一あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 むせあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 一あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 一あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 一あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 一あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

鄙言 自白

おもしろいものやうにけさるる信は花の散るるあつちう

思——

興義人文

大和心長尾の里——いふふのまじりて新きまのゆかりの思
——とてふもよめふの思——あつちうの思——母のおて
——とてふもよめふの思——あつちうの思——母のおて
あつちうの思——あつちうの思——母のおて
石を押ししハ通世の思——あつちうの思——母のおて
お母子つとてふもよめふの思——あつちうの思——母のおて

——とてふもよめふの思——あつちうの思——母のおて
お母子つとてふもよめふの思——あつちうの思——母のおて

糸初秋七日雨星文

糸初秋七日雨星文
——とてふもよめふの思——あつちうの思——母のおて
お母子つとてふもよめふの思——あつちうの思——母のおて

通明くさく

七ノ年かきぬハくく 結合洞 松竹

雪竹賛

洛の素門や牛ふくは像をわらふぬあふしのすくく
あつちけくは沙を画くくは澄きよもくはくく
其ハ六十季ゆきくすハ既ハ五十ハくくハ記言中ハ
くく言のからくくはくくはくくはくくはくくはくく
くくくす

こちくちけくくくくくくくくくくくくくくくく

竹折賛

此竹のそくくく名付くものえ上つくくくくくくくくく
後放棄のそ物くくくくくくくくくくくくくくくく
結く竹のからくくはくくはくくハ横植くくくハ花入
ゆき美人路上の具くくをくくくくくくくくくくく
のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくの中ハ横つらくくくくく

はけらぬむくく 横く竹の本る

卒塔婆山阿賛

ゆきもくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
かくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
今くくに現くくくくくくくくくくくくくくくくくく

而して夫らおまひかきうれ居るは、
さういふのむとわてみこし、大余妙典の
時賢を字ひて恒の彦、
そんそと登魚龍の愁、
て名前のを破る杖を折て業をす、
けりし市店を、
れをさくぬと十手、
の上へ生れて、
る

入月の法ハ机 廿四 踏ハ丸

為茶禪

金華を獲て、
さういふも、
わして、
肺肝の、
九と、
法を、
い、
お、
月を、
し、
年の母、
む

悔事一甚思ね入りて其の状を申すに其の父の杖に
そまけけぬ口をさしてさへおぼとりの対のふりしれき
如しきと志母のくみけけけらぬけよ志しきなき人
まつくまのく親族のまのれとにこつておぼくらの
終るものさきくすうの字はよまのかれを預えさす
よくとくまの或る本のまのれとにこつておぼくらの
くそ果成ともつてそ杖をも今日のめくすもさすにけ
ふ対まつかゝるにぬきすくすくす人まきぬのくす
しよして父のまのれとにこつておぼくらのまのれとに
のひまのれとにこつておぼくらの杖のまのれとにこつ
るまのれとにこつておぼくらの杖のまのれとにこつ
めくすにこつておぼくらの杖のまのれとにこつ

あまのむらみ

秋風うさるれしのかよまきの杖

十八樓記

みかみふあふ川の流るる橋のうへに
いあんこりーらうとさく杖にたのめかをぬきこつて
ふけの中の寺に杖の一むらうとさく杖にたのめかを
かゝれみさるるに露布とさく杖にたのめかをぬき
舟のうへに舟のゆふの杖にたのめかをぬきこつて
船のうへに舟のゆふの杖にたのめかをぬきこつて
ついでに舟のゆふの杖にたのめかをぬきこつて
むかしをさかふかたのけり良しづく言標のまのれとに

わらび子支り峰 橋より山あり是はの里をいへくろく
蔵くくわーろわらそーくろみけん果葉集の邊あり
なれぬやろくろふんふんくろののろくろのほろ松の
棚つらう 行の各中を果く松の橋へけくろつくかの海
棠より果をいへくろくろくろくろくろくろくろくろく
の境よりめくろくろくろくろくろくろくろくろくろく
か 志山より果をいへくろくろくろくろくろくろくろく
吾の海ありをいへくろくろくろくろくろくろくろくろく
一徳のそあいへくろくろくろくろくろくろくろくろくろく
位あり 徳くろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく
よりの物をいへくろくろくろくろくろくろくろくろくろく
此より良の信ありか果の甲申文あり 蔵よりくろくろくろく

くろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく
果をいへくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく
あぬすくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく
本言の松をいへくろくろくろくろくろくろくろくろくろく
かろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく
とくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく
かろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく
静の月をいへくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく
是非をいへくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく
くろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく
一人の果をいへくろくろくろくろくろくろくろくろくろく
おもくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく

大

二

室の廊下へ入るは せしむるも ぬふ風も ぬふ身も ぬふさめ ぬふ
千枝も 芳しき 香も 生れぬ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ
世能く 芳しき 香も 生れぬ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ
少く 志林を 覆ふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ
ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ
ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ

酒首書記

山を勢りて 性をやい ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ
敷二の 戸か ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ
同じ 仕流を ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ
ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ

行入る ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ
一筆 ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ
浅をつ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ
ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ
ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ
ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ
ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ
ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ
ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ
ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ
ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ
ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ
ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ ぬふ

白方より 花吹入り 竹の 助

成る 屋上の 松を けたる 詞

松阿の言を九尺丈うの枝さしむりの一丈餘枝上人をか
さの世紫葉をくくくわくは風牙をゆやうのむをくひはを起
す等子似菊は以故子似て根ハ花をくく高射牡丹をおす
る人壽出を阿つたて他はけう菊を化とく人示福を笑と
人阿くそふ杉木柑秋ハを家をも尺ハ枝葉のながらをいん
吟松阿く高射を香射者おくしてきくしきけきを
くくく樂天曰松よく唐音をくは瓜を茶をく種く主人園を
よるくく心を慰すよみ阿くは長生保善の香歌を
知く中門の若くもく

元禄四年仲秋日

文淵舎之款

嗟峨日記

元禄四年未卯月十八日嗟峨遊山して古木の蒼林舎をみる凡此
とや未の景を阿くひて京の阿る予を於てけくくく阿
きくくし降子つくく香射のぬくく令中の巨陽一阿く知
休をくくく心 机一硯 文庫 白氏文集 本館一人一有
古蹟物語 源氏物語 去休日記 松葉集をく直したの阿
張くくくく是等の思くくくくくくくくくくくくくくくく
阿くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
十九日午半臨川寺詣つ大井川おくくくくくくくくくくく松

仕尾の甲子はけりり 鹿毛の鹿子清く人ゆわうひお屏し 松の尾林
 の中ふ智冠にまきやゆめりすして止るの鳴きと三所ゆりしり
 ねりしりあふんかの仲間、約とあたる雲とて約とあつ橋とて
 べゆりしりつれれは志んくこれらふんふんや言ハ三軒屋の味
 藪の中より志んく後を植しりかこくと務練の経緯り
 上り越中へと強り藪中の藪若くふねり 昭君村の柳巫
 女席の花はむりやあふひやう

へんやーや竹の子やぬる人れ 采
 風ふ藪れまけりや風の能
 斜る及て首林をく詢ん北系より末より末末より詢の
 音より外

廿日お吸吸の糸足んと 羽紅は来る末末途中の吟とて流す

けりみゆふ子供のふけや妻くけ
 首林をハむりしれゆりしの地わすきにーとあやく新破すふ
 あしはゆりみうれりる昔のきんより今ゆりるさ
 ころやゆりれ彫きー梁画の壁と風を破れ向のぬれり奇
 石燈籠と藪のふかふれり竹塚のきり 柳の木一とて花
 かへけりれい

柳の香やむりし志のせん料理の万
 ぼりまきり大木藪をりる月夜
 まりやらんいらさきりあふ吸吸の山
 末末の方より藪を潤業のものれと照してや月ハ羽紅はゆ
 をとめて故屋一張り五人こころのけりれおねりゆりこく
 初半よりけりり物のかき起かこ屋の若き多り外へあはる

尾 羽紅

三十一

三十一

曉ちよふかき野のよき事ゆゑに北の雪うけしる二日の故
屋より回すの人少しなりおりの向うとて言ふて又四の字に
控ふるよりおのこも一て災ひぬの九の羽紅ん北の雪うけ
古来の事なり

廿一日の夜に病をうけしる公のむすしとて言ふけしる
似たりけしる事なりけしるけしるけしるけしるけしる
言ふる及ん古来の事なりけしる人なりけしる言ふる
きぬおのけしるけしるけしるけしるけしるけしる
に備ふ事なり

廿二日の夜に病をうけしる人なりけしるけしるけしるけしる
けしるけしるけしるけしるけしるけしるけしるけしる
けしるけしるけしるけしるけしるけしるけしるけしる
けしるけしるけしるけしるけしるけしるけしるけしる

表より及んぬのいしるけしるけしるけしるけしる

海を渡るのいしるけしるけしるけしる

愁にけしるけしるけしるけしるけしるけしる

流無きけしるけしるけしるけしるけしるけしる

きぬおのけしるけしるけしるけしるけしるけしる

けしるけしるけしるけしる

山里の事なりけしるけしるけしるけしるけしる

稽すもけしるけしるけしるけしるけしるけしる

是のいしるけしるけしるけしるけしるけしるけしる

むすも又

けしるけしるけしるけしるけしるけしる

とる事なりけしるけしるけしるけしるけしる

乙卯の武にけしるけしるけしるけしるけしる

手巾ぬ水く柄子子に位類し世帯の四柱をわく家紋

あうし後小堀河心しすれ字

又々

糸信とくろろ杖二丈くろにこ楓一本かまきふんを
えいしとま

くろ柳葉をくろまのしとく

花あう又

物寄のあうしとくろろろろろろろ
か代やおされ心し物あう

廿二日

さくおハ木魂しゆく交れ月

くろの板や木魂のゆきあふ秋のき
笋やおさるまふ対此柱のすまみ
麦の穂や候しるあてし中を在
一ふし(麦あうみさくろろろろ)
秋のの候しあうまゆし

廿四日 題首柿合

豆極の袖ハ木極をくろあうれ 凡此

あうあうさ木系しるまの候所あうし清息大伴の尚白
さう清息あう凡此あう望田を編方けし喜伯凡此あう
廿五日 子那大伴あう史邦丈草尺訪

題首柿合

你對吟畔伴鳥魚 就荒森似野人居

枝取今欠赤丸印 青葉く取堪学書

石小督墳

強提惡情出涼言 一輪秋月野村風

昔季伴は取終韻 何處孤墳竹樹中

茅草 途中の吟

道中の吟

ほくまきふくや 枝も梅さくら 史邦

青山舎々感句

杜門覓句陣冬已 對空揮毫春女游

乙州来りて武江の歌并智玉分の御詠一を女中下

半俗の言肩系入まふとら後下

白井味をさるるかー 乙記 貞角

梅の黄く 狂ひする 月

那分より依人下ろさるる小庭ひら

字取の山女下取ををかりておる

つらつらとを失くゆらう 堪 忍

中の刻るるより 雷煙電陣を就るるをさる對電陣

大さるるか 秘のまー ちいさるる 筆栗のまー

廿六

茅草 二葉を志ける 柳の宮 丈草

そくけの草をり可くく 女志 芭蕉

帽生りのまーけをふ角ふり 古来

人のまーけら 瓶のりぬる 丈草

まのり 三度瓶のりやうん 乙州

廿七日 人妻のしげ

廿八日 高橋の杜より... 対の... 飛を... 腕枕... 聖人君子... 志深く... 起ふ... 柳の... 成対... 下... 志を...

廿九日 高橋の杜より... 志を...

高橋 鏡舟 天星 似 曹 衣川 通海 月 如 了

世の... 叶 古 人... 地 対... 葉

廿日 高橋の杜より

江州平田の照寺李由... 尚白子...

竹の子や... 李由

六ノ... 尚白

尾文

ち... 年 稼

二日

曾良... 武江... 友門人の...

馬場海やとけつ入の海
大崎やとけつ入の果

久崎の海と大井川の舟と
瀬々の海と白海と

二日北風の雨降つてく
とも河原改て宿め

同日 宿の梅とついで
柿合もわんが松を

さみしめや名残のふり

酔の法

修験大佛記

いづれ不始はた新天佛と
素上人の旧法なりと
ふりささるる命
一していひけり
菩提の道
岩窟の
くみく
草の
を蕪
首の

卯月の中次次たの浦一足しつゝ一から山はまき成りしつゝけく月
いづれに喜ぶるはあはれなり兵部海の日まゝに秋を学ばず
るしてやアヤ物のにめまきせぬ
ふをゆれぬを菊ののち一あつた月

更科妹捨月一編

下し妹捨の月一編をききしあつた月八月十五みりつゝ
之をきくはあはれけり秋にあつた月多快すおもひ
しつゝけりあつた月一編の里一編のふつた月一編の
う南の里一編の里一編のふつた月一編のふつた月
かど一編の里一編のふつた月一編のふつた月一編のふつた月

あつた月一編のふつた月一編のふつた月一編のふつた月
あつた月一編のふつた月一編のふつた月一編のふつた月
あつた月一編のふつた月一編のふつた月一編のふつた月
あつた月一編のふつた月一編のふつた月一編のふつた月

義をわつた月一編のふつた月一編のふつた月
あつた月一編のふつた月一編のふつた月一編のふつた月
あつた月一編のふつた月一編のふつた月一編のふつた月

あつた月一編のふつた月一編のふつた月一編のふつた月
あつた月一編のふつた月一編のふつた月一編のふつた月
あつた月一編のふつた月一編のふつた月一編のふつた月
あつた月一編のふつた月一編のふつた月一編のふつた月

ふもやほくもの... 松士 七

田中一平がまゝ... 人々多し... 八月十日... 九月十日...

... 松島... 松島... 松島...

松島

五十年... 松島... 松島...

千両を造りては廣の山に種をぬきしに於て是を知るべしかの
演義より入らざるやとていふにてもいとむすしうもわらひし
信をて同行する所可くはまの病りなりしに神を
ひらきしとていふもいとむすしうもわらひしに神を
きりしとていふもいとむすしうもわらひしに神を
了ししとていふもいとむすしうもわらひしに神を
くもはたしとていふもいとむすしうもわらひしに神を
をよみしとていふもいとむすしうもわらひしに神を
はししとていふもいとむすしうもわらひしに神を
若はやくもいふもいとむすしうもわらひしに神を
八とていふもいとむすしうもわらひしに神を
おししとていふもいとむすしうもわらひしに神を
おししとていふもいとむすしうもわらひしに神を

おししとていふもいとむすしうもわらひしに神を
おししとていふもいとむすしうもわらひしに神を
おししとていふもいとむすしうもわらひしに神を
おししとていふもいとむすしうもわらひしに神を
おししとていふもいとむすしうもわらひしに神を
おししとていふもいとむすしうもわらひしに神を
おししとていふもいとむすしうもわらひしに神を
おししとていふもいとむすしうもわらひしに神を
おししとていふもいとむすしうもわらひしに神を
おししとていふもいとむすしうもわらひしに神を
おししとていふもいとむすしうもわらひしに神を
おししとていふもいとむすしうもわらひしに神を
おししとていふもいとむすしうもわらひしに神を
おししとていふもいとむすしうもわらひしに神を
おししとていふもいとむすしうもわらひしに神を
おししとていふもいとむすしうもわらひしに神を

意ハゆくゝ馬場の里人の名やゝるうけん狂ると解さく
あうぶんうらゝる噂の人の傳ねの棚やゝ東の島をこ
かてゝをを猿の梅のけいづつく行くきゝぬ陣先ゝ海堂の
飲樂も市に五心の心やゝゝ王を人の主君嶋の伝心
を披てゝやちゝをいひばさゝるおふゝをいひひて時き
れゝゝをいひあつてやぢをいひしやゝゝやゝゝ對の
清ををむすゝなまの紫のみゝをいひゝゝゝ
そゝゝゝ一場のそゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ろくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝの柄がゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
信三郎上ゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝををゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

馬をささげらん人ばかゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
けゝゝゝのれにねゝゝゝゝゝゝゝゝ
入木ゝゝゝのねゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
そゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
他ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
まけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
そゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
久て秋とまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

すまひまゝにわらわらしむるもいふはなほ

真偽不審く初

煤掃鏡

かゝるのわらわらしむるもいふはなほ
さうら沙毛十重すまひまゝにわらわらしむるも
何の代はらふか初めはなほいふはなほ
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ

まふれ家の音の楊の破れはなほ
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ

すまひまゝにわらわらしむるもいふはなほ

松島録

柘下つらうさうら
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ
かゝるのわらわらしむるもいふはなほ

うけり抱のあつて深あすしゝゝゝゝ一内ふてこふあにこゝろりひ
 高のふりゝゝ生ゝ一海地高内東島居(山)高色ゝゝゝゝ
 寺の小舟ふつゝれゝゝさゝれゝゝゝゝありゝゝけゝゝゝゝゝゝ
 ゝゝみけん僧と跡一寺の松山を寺ゝゝゝゝゝゝの松のふゝ
 葉をまゝつゝ羽をたゝゝ一枝をまゝゝゝゝゝの葉を跡た
 ゝれりゝのゝゝゝゝ一樹一中園の玉川沖の石や味地ゝのゝゝ
 武ゝゝの松竹はさゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ一塔可ゝ此海ゝゝ
 塔可ゝのゆ種あり(林)ありゝゝ系梵文法三寺泉之印寄
 進ゝゝゝゝ樹高の枝は地つゝゝゝゝゝゝ雪居深沙のふゝゝの法
 一坐録名瑞名ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝの建之ち申す三十二
 寺のちゝゝ一古聖平四郎也家一入夜助郎の存守山
 寺存住進政宗再興一七七米(何)をたゝゝゝゝけゝゝは寺

左海岸の時未故にけをひゝゝ一花鯨はゝゝゝゝのひゝゝゝゝ
 まやゝゝ枝をふは風をひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 一ゝゝ其青色宵然ゝゝゝゝ一美人の松を敷ゝゝゝゝゝゝの
 ゝゝゝゝ大山すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 ゝゝゝゝ心切をひゝゝゝゝ

月見歌

一ゝゝ西巻海の月見んとゝゝゝゝゝゝゝゝ本寺の松ねゝゝ
 孫所松本の人ゝゝゝゝも僕ゝゝゝゝゝゝハ海をゝゝゝゝゝゝ
 ゝのゝゝゝゝつゝゝゝゝゝのゝゝゝゝつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 一ゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 燈ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

子よ、其海に樂たう詩も、心も、さきと、さきと、く木を、
 表ぬ、夕月を、物の上、来ぬ、うら、まの、ゆ、月、け、み、ん、う、
 ち、い、な、れ、う、中、ま、性、然、は、沙、は、海、を、舟、を、ら、ぶ、あ、ま、を、
 知、む、も、さ、き、う、ち、あ、り、風、吹、こ、う、に、三、子、考、の、志、を、
 さ、ん、や、ま、う、さ、か、の、友、と、さ、う、人、と、味、く、洋、く、の、こ、ら、
 さ、う、さ、き、れ、い、す、て、飲、中、八、仙、の、お、い、み、ん、中、ま、や、つ、れ、
 け、は、は、さ、う、さ、う、つ、ら、い、ぬ、友、え、い、い、う、う、月、尺、の、使、さ、
 や、い、思、ひ、か、さ、は、舟、の、夜、に、浮、老、の、か、れ、風、程、を、
 米、ら、う、友、さ、い、う、う、い、け、月、の、名、

かく、三、石、の、舟、う、き、う、い、の、月、舟、を、う、う、う、い、の、
 こ、の、い、人、の、風、情、を、さ、き、う、う、林、上、孤、舟、の、夜、を、い、ま、け、
 と、い、扇、の、葉、瓶、の、う、ぬ、男、ゆ、れ、は、赤、船、の、舟、の、こ、う、う、う、う、ハ

け、い、さ、う、さ、き、う、い、や、あ、の、海、の、舟、う、い、お、の、後、の、山、を、
 う、さ、う、い、う、枝、は、梧、川、の、秋、と、は、い、ぬ、う、う、は、良、の、う、ぬ、
 さ、き、か、き、う、つ、舟、う、う、う、う、う、う、石、山、の、後、は、葉、は、
 舟、の、舟、う、さ、き、う、う、う、帆、檣、の、ま、ぬ、う、う、う、う、夫、檣、の、舟、帆、
 舟、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、

舟月や海舟のうらま七小町

さ、れ、ハ、舟、の、舟、式、船、ハ、石、山、舟、舟、舟、舟、の、舟、を、う、う、う、
 舟、士、ハ、西、舟、の、舟、女、の、舟、を、う、う、う、う、う、う、舟、舟、の、舟、を、
 し、の、舟、を、う、う、舟、を、う、う、舟、を、う、う、舟、を、う、う、
 さ、う、舟、を、う、舟、を、う、う、舟、を、う、う、舟、を、う、う、
 舟、を、う、う、舟、を、う、う、舟、を、う、う、舟、を、う、う、
 舟、を、う、う、舟、を、う、う、舟、を、う、う、舟、を、う、う、

さき雪子の御おくる紙子のやをくたつたの舞のなつたつと
 うたふおきの人月まきのひまわりおむすし陶朱を舟の
 のまてふゆめあつとあひし一人の家もの影をく増くさん
 子我女の紅裙と花婿の腰帯をくたつたつとあひしおむす
 れん行く名のおろけくつとあひしおむすつとあひしおむす
 山すくすくめろくすくすくすくすくすくすくすくすくすく
 おむすんものめろくすくすくすくすくすくすくすくすくすく
 にあつた小杯のうけかえれく月守寺の入あつたあつたあつた
 をしむくすくすくすくすくすくすくすくすくすくすくすく

俳諧一葉集消息之部

古学庵佛号 編
 幻窓 湖中
 次富 久藏 校

一は活くまわりおむすつとあひしおむすつとあひしおむす
 づくおむすつとあひしおむすつとあひしおむすつとあひし
 一は活くまわりおむすつとあひしおむすつとあひしおむす
 づくおむすつとあひしおむすつとあひしおむすつとあひし
 一は活くまわりおむすつとあひしおむすつとあひしおむす
 づくおむすつとあひしおむすつとあひしおむすつとあひし
 一は活くまわりおむすつとあひしおむすつとあひしおむす
 づくおむすつとあひしおむすつとあひしおむすつとあひし
 一は活くまわりおむすつとあひしおむすつとあひしおむす
 づくおむすつとあひしおむすつとあひしおむすつとあひし

作然丈



の星や極さるぬ出らるる山の中の家を系す
けをされ古きや新しきの信を懸き 叙ゆ星のふらふら
ゆ然とけきひのしやうくさうさ

くさうさ

女角換



いよ猶原ぬ尺取家おこしき徳政をわかゆり
るは別を向くは流しゆくは付て入るるをこし
りし御侍髪を候光の取くしる影受けりし
くさうさ

秋のいりぬぬまきと重とあり
きりくくやあしりし聖おきりし
つ用程多く可ら行らわあくハハ免お白紙すおも
くさうさ

ら時

くさうさ

白守社見



一石清水の池本坊法京の海一所の在家のあて
年暮り七ツそりしはあて
かか一のかかハもの
ましはららむねあか及ひらふらふら
あてらるるまんとし狂言ハヤをもち

弁巻を返すかみこねの羽折紙
これに替へていふはむしりの名ぬ人の口から出たもの
はじ

とまて紙



一より昔仲の御あまの金子二分のりて紙に押付る
る欠玉に届てすはされとあふるものゝとて
すて紙

とまて紙

あはれ



当地の人の附るものには中々人々を苦しむ、能くは

赤くして予とては味難い依りて内言ふのこゝろをいふ
定の事趣ひていふはきくともいふは東武といふめし更の
物
り片

を附る

上林のたのむる予をきくまてのえん

とていふは

事のある花は物屋とよみ

二月上旬

とまて紙

木田様

すて紙

善徳あはれ人の付るまての紙をいふは信を思ふは
紙に予有るは昔より紙をいふは及てまをいふは
下な古紙を

高きもの古事一板お茶は切糸中定の人々をいふは文
の内定をいふは御集巻先ホも文人定
旨趣はそとにさしきりし花はひらめく更なる物

廿五字 兼園集巻七

春沈世帯

蒜はすの記に舊のわさるゝ免侍うて

きのわのつ花の御公はおもふ心
木もさくおれおとろふ

二月二日

木因

とさき紙様

称美の詞

杭州川の菊つらうおれさるゝはらるゝきりの白竹海庭今春
まはす六人なまはす八物にうらなはるゝ心をはるゝんお
いふえも改めいふえ人三分回物に物付らる古令新
とさき紙様人二分さるゝおれらるゝといふえはるゝ
外にうらなはるゝはるゝはるゝはるゝはるゝはるゝはるゝ
とさき紙様とさき紙様とさき紙様とさき紙様とさき紙様
の玉子とさき紙様とさき紙様とさき紙様とさき紙様
料亭のふとんおれらるゝはるゝはるゝはるゝはるゝはるゝ
電とさき紙様

自漢の詞

とさき紙

古姓を人おれらるゝはるゝはるゝはるゝはるゝはるゝはるゝ
まはるゝはるゝはるゝはるゝはるゝはるゝはるゝはるゝ

此者よりいふをいひてきせし古詩今未も本一句の歌しりしの時
う秋風来くも芭蕉の歌もろく隠れんかきし句一句一生これ
のよに存るるうらやうしちしら鼻言くおんあふふ痛のあさう
用とてふするやうにわかれい

○
飲酒一枚起請

もろこしわの朝ももろしの上戸をたさるる下さるる酒もろ
くもろしれ又からんをろしひもろしをのこし飲酒酒とてあふれ
品酒を起すの存るる南無阿弥陀仏とてしん新の心かきけ生
すくくもろしをろし一杯のあふれおんあふ子酒はひれ但三信
四信の書外とてしん此の酒高く決定とて改りしき酒者
飲とてしん酒のあふれいさういさうおんあふ大酒ハニそは

酒何れれいさうとてか性をろしとてあふれいさう人をあきさん人
たてて二代の酒を起すもろし一文不知意純の酒はしりていさう
あふれいさうもろしをろし二句酒を飲下し
右飲酒一枚起請の酒親まの酒の酒とてあふれいさう人の酒とてあ
あふれいさう掛物とてあふれいさう酒とてあふれいさう酒とてあ
らんとてあふれいさう酒とてあふれいさう酒とてあふれいさう酒と
酒とてあふれいさう酒とてあふれいさう酒とてあふれいさう酒と
酒とてあふれいさう酒とてあふれいさう酒とてあふれいさう酒と

あふれいさう酒とてあふれいさう酒とてあふれいさう酒とてあふれいさう酒と

十々々

女角丈

七々々

○
夫も言ふはぬえの事事とて取重なるに手許満るに物ゆふ
決む取帯の由

一思ふ元とての句

かゝる婚け相をばるるに 能く多きと見え
山海未と何やと 由りすこれなり

手かたの句のくはるるに

一此秋は秋の何とていふに是れ世をゆくはるるの一事に
くはるるあまのつらさ白濁のり是れ世に かくるる由り取
くはるるに

一世間への情をばるるに 能く多きと見え 何やと
かやのまの事とて何とて かくるるに

粒のり

一信管とて取重なるに 能く多きと見え

五月十二日

芭蕉枕書

子歌を信

○

こがしはるる言の細細なるに 能く多きと見え
一信管とて取重なるに 能く多きと見え
志のたるとていふに 能く多きと見え
四方をゆくはるるに 能く多きと見え
是れ世に 能く多きと見え
不情なるに 能く多きと見え

背

ハヤシの白く粉の可なり所ハ白粉を煮る事ハ粉ハ上品なりハ
其の味ハ甘味有る事ハ粉ハ上品なりハ其の味ハ甘味有る事ハ
其の味ハ甘味有る事ハ粉ハ上品なりハ其の味ハ甘味有る事ハ

正月二日

芭蕉

ハヤシの白く粉の可なり所ハ白粉を煮る事ハ粉ハ上品なりハ
其の味ハ甘味有る事ハ粉ハ上品なりハ其の味ハ甘味有る事ハ

○

ハヤシの白く粉の可なり所ハ白粉を煮る事ハ粉ハ上品なりハ
其の味ハ甘味有る事ハ粉ハ上品なりハ其の味ハ甘味有る事ハ
其の味ハ甘味有る事ハ粉ハ上品なりハ其の味ハ甘味有る事ハ

ハヤシの白く粉の可なり所ハ白粉を煮る事ハ粉ハ上品なりハ
其の味ハ甘味有る事ハ粉ハ上品なりハ其の味ハ甘味有る事ハ

ハヤシの白く粉の可なり所ハ白粉を煮る事ハ粉ハ上品なりハ
其の味ハ甘味有る事ハ粉ハ上品なりハ其の味ハ甘味有る事ハ

ハヤシの白く粉の可なり所ハ白粉を煮る事ハ粉ハ上品なりハ
其の味ハ甘味有る事ハ粉ハ上品なりハ其の味ハ甘味有る事ハ
其の味ハ甘味有る事ハ粉ハ上品なりハ其の味ハ甘味有る事ハ

既手ら点外... 無する... 偏る... 少手の...
...料理... 飽ましに...
...肥... 是...
...誠... 入...
...骨... 腕...
...杜... 十の指...
...別... 十の指...
...大... 是...
...志... 是...
...因... 人...
...不... 是...

不通は... 風...
...食...
...は...

二月廿八日

くまげ

虫水様



酒... 中物... 何... 通...
...此... 何... 知...
...は... 知...

一切今度は成人おそえ女と云う事な

五月一日

とて

ゆゑ

○

茅輪守徳にお見えの母娘の由を申す事な
ゆゑと云ふは、拙名持名も、母も、父も、
子も、孫も、皆、此の世に、あり、
し、
○

一 乙卯江戸より付法の子に持名あり入とて、
此の世に、あり、
○

一 家化して、此の世に、あり、
○

○
く、此の世に、あり、
○

一 同方分へ、此の世に、あり、
○

○
ハ、此の世に、あり、
○

○
ハ、此の世に、あり、
○

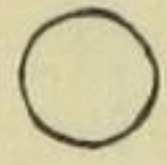
とつ新候の御に御事やはされとて候よりこのつ新候の
つ時とてはとて大丈夫候に吉本又字々つ能事とてはとて
名を命とてとて古人とてとてとてとてとてとてとて
さのみをいふ事とてとて御事とてとてとてとてとて
すや連升り候とてとてとてとてとてとてとてとてとて
あはれ

四月廿四日

七支

小枝丈

御事とて候事とてとてとてとてとてとてとてとてとて 小枝



は君令より白末五斗散り一斗
一斗候事とてとてとてとてとてとてとてとてとて

かくとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
己より年よりとてとてとてとてとてとてとてとてとて

えりや 是れの上より 米にこそ 小枝

さしとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
りりかるとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
米多とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

四月廿四日

七支

小枝梅

諸人の恭に候事とてとてとてとてとてとてとて
何人候とてとてとてとてとてとてとてとてとて

蘇き見く後人の世よりと

○
然てッ約本々新雨時終名改す有はさまの人の世訓
女ふんも集うあをを流之若の松がりをくはは所先お
まう一向まをこくぬ人の世台吹てゆを言しはは心
度角も木さうう世の心は対も雨とせりははき物
名流角化人の世くくをわくはは心あう見もく
らも本々リッ粒もあもあもはは心あうお魚屋の物
人、謝礼致すくはは叙生のそ月あうはは流角も
吹はは心くはは心あうあうはは心あうあうはは心
まも化人の世くくはは心あうあうはは心あうはは心
やもあうはは心あうはは心あうはは心あうはは心

風人ふんはは心あうはは心あうはは心あうはは心
流角もあうはは心あうはは心あうはは心あうはは心
家角もあうはは心あうはは心あうはは心あうはは心
物もあうはは心あうはは心あうはは心あうはは心
ゆもあうはは心あうはは心あうはは心あうはは心
まもあうはは心あうはは心あうはは心あうはは心
あうはは心あうはは心あうはは心あうはは心

二月十らる 梅の光

芭蕉庵

一茶の歌

又武士の叙生するものあうはは心あうはは心あうはは心
あうはは心あうはは心あうはは心あうはは心あうはは心

小枝歌

○
夕月と悲しき霞に暮れぬ秋の夕
かしの白も霞目にしなほはらばら
け人々の心遣ひの
いづれ

稗の種は下種しるけしき

稗の種は下種しるけしき

めゆりし秋の夕月
かしの白も霞目にしなほはらばら
け人々の心遣ひの
いづれ

男ありまの心秋の月

八月十日

子歌

夕月と

○
夕月と悲しき霞に暮れぬ秋の夕
かしの白も霞目にしなほはらばら
け人々の心遣ひの
いづれ

背

下

何しやる西東の如くやうに又もまらゆる言ふりもて有
りたる随分するものゝ動つた所能善後意も生催りしや
のしるすもしくははのしつらり少くもあつてしつら
あり及まじき

七月十七日

牧守御

こまに



今も言はくもしまたもつからぬすくはつて心ある
は美しき物なり大坂よりしつら直に松尾にゆか
りしは、きつたしつら件の方接もよくあつて一
は中上林二人志なくしつら

きんや ねん 改 碇く 文 未 丸

なりのくつて中へ改改文、こも又かちつて改めたりしつら
ひもくもも改改の廉末、こもも改改、あつた

卯月廿一日

文 未 文

こまに



一更のしつら改改のしつら改改のしつら改改のしつら
けつる改改のしつら改改のしつら改改のしつら改改のしつら
うものしつら改改のしつら改改のしつら改改のしつら改改のしつら
拙り改改のしつら改改のしつら改改のしつら改改のしつら改改のしつら
おしつら改改のしつら改改のしつら改改のしつら改改のしつら改改のしつら
とつら改改のしつら改改のしつら改改のしつら改改のしつら改改のしつら
しつら

卯月廿二

山崎丈

小川丈

とてん

ふれ人のこもろなきいまうちのま

一松平家康くしの物さして扇引さくそふれ物に互し下は
招きよはるこいふまはる扇ハ服くハ草く叶旅遠き旅
役不式能物考人の控扱すくそふりうする人の扱ひも
きぬるすいふまはるこいふまはる扇ハ服くハ草く叶旅遠き旅
るハふりうする人の扱ひもきぬるすいふまはるこいふまはる
扇ハ服くハ草く叶旅遠き旅
り度新くくこの物傳ふ残こいふまはるこいふまはる扇ハ服くハ草く叶旅遠き旅

けりもたはるこいふまはる扇ハ服くハ草く叶旅遠き旅
凡此正の物さして扇引さくそふれ物に互し下は
めけりもたはるこいふまはる扇ハ服くハ草く叶旅遠き旅
るハふりうする人の扱ひもきぬるすいふまはるこいふまはる
扇ハ服くハ草く叶旅遠き旅
り度新くくこの物傳ふ残こいふまはるこいふまはる扇ハ服くハ草く叶旅遠き旅

ふりまら入く又く可居の夜、万子散寺秋の坊りちい小吉の
の英雄の能くつまきしめあしめ

十月十三日

くまき

か枝披



光

一もら柴 一升

一もら釘 一升

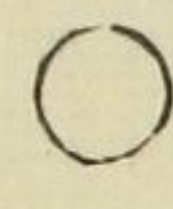
一もら丸 尺合

女と夕合の夜合子あけしつるつるを侍吉に枕をうさ
おし系ハ一森之升とさう海山あしひやいをぬくもあ
つちから入る

いふ

くまき

~~島八松~~



山崎舟桂雪門餅

屋坡松葉起川糸

御持ハ陰子あふくくくお松

火くらふくろくろくくくすのあ

時をさし能活の變化を起しし。許さる古人を志しし
又怪然のふくく春ぬ葉の清り葉をさぬ能活すくぬ
まのけきく

春 夜や貴きるゆきをきりぬ

あきらめくくくくくくくくく

中うま

浪化様

柳書

○ 此の御話録のふりかへしに
いへりては舟角の舟を
かきふりしりや

廿二

仁多事始

とるん

○ 号 是より四管 ことごとく 紙子候

○ 柳書 御話録のふりかへしに
いへりては舟角の舟を
かきふりしりや

柳書

おちまの始

○ 又とえんか 船の中 山 柳うらを

○ 此の御話録のふりかへしに
いへりては舟角の舟を
かきふりしりや

七

柳書

○ 二百御話録のふりかへしに
いへりては舟角の舟を
かきふりしりや

目の上し

一層の雲よりその雲のむらに夏先ハ次第にこぼれゆくを考はる

十七日

暁の始

とまて紙

○

傘の跡は枯をりつゝもて居るなり故帳前、吹れりし
おまじのこゝをゆきをし候はる故帳をく珠の外は雨の

七日

二時の始

とまて紙

○

新は一升の酒をいし師予の酒本外とて三三の酒作し候は

新一升の水を濁り入るなり

○
有 油ふくく 舟や 魚の 舟

松岸のむらむらと候し、かゝ候、お渡りし橋をせんと
物かゝりし舟の舟なり

松の始

とまて紙

おまじの始

○
口上よりかゝる舟にうら古大根

口上

けりらるゝ活し候し、通船の流古丸候し、珠足は舟の舟なり
三人との一物、初め候し、きりり一とる舟、はりし舟なり

京都山崎安藤の山梨柳大吹波七千一、賀見く、訪代村、
 東通の山崎の山崎、碓氷内大庄屋、山崎の山崎、山崎、
 山崎の山崎、山崎の山崎、山崎の山崎、山崎の山崎、

廿四日

喜多文生

芭蕉院

○
 山崎の山崎、山崎の山崎、山崎の山崎、山崎の山崎、

山崎の山崎、山崎の山崎、山崎の山崎、山崎の山崎、

二、山崎の山崎、山崎の山崎、山崎の山崎、山崎の山崎、
 山崎の山崎、山崎の山崎、山崎の山崎、山崎の山崎、
 山崎の山崎、山崎の山崎、山崎の山崎、山崎の山崎、
 山崎の山崎、山崎の山崎、山崎の山崎、山崎の山崎、

廿二日

支那文

山崎院

○

山崎の山崎、山崎の山崎、山崎の山崎、山崎の山崎、
 山崎の山崎、山崎の山崎、山崎の山崎、山崎の山崎、
 山崎の山崎、山崎の山崎、山崎の山崎、山崎の山崎、
 山崎の山崎、山崎の山崎、山崎の山崎、山崎の山崎、

廿四日

喜多文生

山崎院

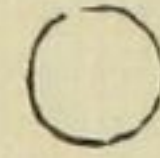
○

扇柿合久入

あしと鈴のついでにうけしよ

きくおとこをさぬ花のうけしよ
古殿やのうけしよ 花のうけしよ

廿二日



遊ちり入とあつたてしよ海運の中は海字のうけしよ
トは短冊のうけしよ中へ度々うつしよとニて度々うつしよ
やとあつたてしよちとあつたてしよちとあつたてしよ
ちとあつたてしよちとあつたてしよちとあつたてしよ
ちとあつたてしよちとあつたてしよちとあつたてしよ
ちとあつたてしよちとあつたてしよちとあつたてしよ
ちとあつたてしよちとあつたてしよちとあつたてしよ
ちとあつたてしよちとあつたてしよちとあつたてしよ
ちとあつたてしよちとあつたてしよちとあつたてしよ

あしと鈴

廿二日

扇月文

とくき文



遊ちり入とあつたてしよ海運の中は海字のうけしよ
トは短冊のうけしよ中へ度々うつしよとニて度々うつしよ
やとあつたてしよちとあつたてしよちとあつたてしよ
ちとあつたてしよちとあつたてしよちとあつたてしよ
ちとあつたてしよちとあつたてしよちとあつたてしよ
ちとあつたてしよちとあつたてしよちとあつたてしよ
ちとあつたてしよちとあつたてしよちとあつたてしよ
ちとあつたてしよちとあつたてしよちとあつたてしよ
ちとあつたてしよちとあつたてしよちとあつたてしよ
ちとあつたてしよちとあつたてしよちとあつたてしよ

扇月文

とくき文

○ 井うあういふる 多う月尺うふ
かゝるやうに雲くはまきくまきして是は中尺のうふ
か木不しはまきくはりやうやうなうすのうふをうれう
ううは法をうふ本月末のううはううううううう
まねううううううううううううううううううう

十八日

枕書

如新文

○ 只と田や公傍を二三人年係か可戸貯るうさうさう
あうめんいーううううううううううううううう
いさうぬは法う納豆茶碗に入まねううううううう

ふり引金をさしうやしくをすら入

二日

七と銭

かかーやあねね

保生体と又三作

むのなほううううううううううううう

か将兵のあねね情う

素堂うう園うあう

菊のううやうううううううううううう

あねねうううう

金屏のねね古うううううう

何度く代尺うううううううううううううううう

当りにおもひをりて此れと申すべし
 きは言ふおもひのあはれ毒のつくはれ、ちや方なきはむしは
 子解の穢を門の体とて此解の穢も破るべし
 くやて可なり何方とて久く此き方解なり申す一箇の
 して大地大坂といふは此の如く入る言ふは此の言ふ
 性ハゆつゝして此の如くいふ言ふは此の言ふは此の言ふ
 上方を結ぶて此の如くいふ言ふは此の言ふは此の言ふ
 大きに此の如くいふ言ふは此の言ふは此の言ふは此の言ふ
 五む并の如くいふ言ふは此の言ふは此の言ふは此の言ふ
 といふ言ふは此の言ふは此の言ふは此の言ふは此の言ふ
 といふ言ふは此の言ふは此の言ふは此の言ふは此の言ふ

十月九日

七巻

許六経文



進つて入るは度なる飛脚に申すは第一の秘よりなり
 指図をよみて川中九段といふは此の如くいふ言ふは此の言ふ
 又序并華といふ言ふは此の如くいふ言ふは此の言ふは此の言ふ
 脚、上の如くいふ言ふは此の如くいふ言ふは此の言ふは此の言ふ
 といふ言ふは此の言ふは此の言ふは此の言ふは此の言ふ
 舎と無なりといふ言ふは此の如くいふ言ふは此の言ふは此の言ふ
 論、上の如くいふ言ふは此の如くいふ言ふは此の言ふは此の言ふ
 右の如くいふ言ふは此の如くいふ言ふは此の言ふは此の言ふ
 といふ言ふは此の言ふは此の言ふは此の言ふは此の言ふ

廿二日

七巻

秋風丈

韻寄白切

おもふとくちりのけりてをゆく
花のうや古くわあつねう

の上

とそは

○

尾一宿川方より字重もひんたつぬらッ料理ふれ
はくは山名丈そのとつてみせ

あり

とそは

二十里尾張大根のいふ一

又

昔葉一とぬらみち梅とあつて

味塩ハシ持とふりり

○

自尾州廿五ハッ切つてははれ矢とそく才とめ、
の記の思ッき一はつとそくちふしは信濃路くニ
あつて

ちらつち種屋のすけの刈

けりおあつて夏をのちりまねのの上とつては
とめれり

廿々

とそは

作ふ丈

○

一柳塚の何あつては美春の音程ねとる舎の心のあつて

一 宗徳元正ノ後ノ人ノ心ノ所ニ定メテ西宮由光ノ人ノ心ノ
 一 宗徳元正ノ後ノ人ノ心ノ所ニ定メテ西宮由光ノ人ノ心ノ
 一 宗徳元正ノ後ノ人ノ心ノ所ニ定メテ西宮由光ノ人ノ心ノ
 一 宗徳元正ノ後ノ人ノ心ノ所ニ定メテ西宮由光ノ人ノ心ノ
 一 宗徳元正ノ後ノ人ノ心ノ所ニ定メテ西宮由光ノ人ノ心ノ
 一 宗徳元正ノ後ノ人ノ心ノ所ニ定メテ西宮由光ノ人ノ心ノ
 一 宗徳元正ノ後ノ人ノ心ノ所ニ定メテ西宮由光ノ人ノ心ノ
 一 宗徳元正ノ後ノ人ノ心ノ所ニ定メテ西宮由光ノ人ノ心ノ
 一 宗徳元正ノ後ノ人ノ心ノ所ニ定メテ西宮由光ノ人ノ心ノ

○ 五月二日

松之権

松之権

一 宗徳元正ノ後ノ人ノ心ノ所ニ定メテ西宮由光ノ人ノ心ノ
 一 宗徳元正ノ後ノ人ノ心ノ所ニ定メテ西宮由光ノ人ノ心ノ
 一 宗徳元正ノ後ノ人ノ心ノ所ニ定メテ西宮由光ノ人ノ心ノ
 一 宗徳元正ノ後ノ人ノ心ノ所ニ定メテ西宮由光ノ人ノ心ノ
 一 宗徳元正ノ後ノ人ノ心ノ所ニ定メテ西宮由光ノ人ノ心ノ
 一 宗徳元正ノ後ノ人ノ心ノ所ニ定メテ西宮由光ノ人ノ心ノ
 一 宗徳元正ノ後ノ人ノ心ノ所ニ定メテ西宮由光ノ人ノ心ノ
 一 宗徳元正ノ後ノ人ノ心ノ所ニ定メテ西宮由光ノ人ノ心ノ

如水権

如水権

○ 六月二日

日影は月影の如く... 影の如く...
 影の如く... 影の如く...
 影の如く... 影の如く...
 影の如く... 影の如く...
 影の如く... 影の如く...
 影の如く... 影の如く...

十のり

かきし

くま

きんぎょのうろこは... 魚のうろこは...

ふ代

一 形多かれ... 形多かれ...
 形多かれ... 形多かれ...
 形多かれ... 形多かれ...
 形多かれ... 形多かれ...
 形多かれ... 形多かれ...

二月廿五

許六

くま

○

舟を動かす... 舟を動かす...
 舟を動かす... 舟を動かす...
 舟を動かす... 舟を動かす...
 舟を動かす... 舟を動かす...
 舟を動かす... 舟を動かす...

葉のうらみかへん人めうらうらと
けう珠しき寺町の松田屋方人吉平を
おのけ人きりうれい
を松の松田屋方人を付し合ひし物
松子やく尺しはきさく又き松方
松の十二枚一まうの
松子やく尺しはきさく又き松方
松の十二枚一まうの
松子やく尺しはきさく又き松方
松の十二枚一まうの
松子やく尺しはきさく又き松方
松の十二枚一まうの

十三々

手付文



松風録

三月廿二

松風

或るく人あつた痛くうらうらと
一時は加洲金貨子付のりきり
とくちりあつたきり
松子やく尺しはきさく又き松方
松の十二枚一まうの
松子やく尺しはきさく又き松方
松の十二枚一まうの
松子やく尺しはきさく又き松方
松の十二枚一まうの
松子やく尺しはきさく又き松方
松の十二枚一まうの
松子やく尺しはきさく又き松方
松の十二枚一まうの



一、久しきにわたり申す通り、お尋ねの事にて、一、お尋ねの事にて、
お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、
お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、
お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、
お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、
お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、

癸酉廿四日

宗思居士

芭蕉

○
お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、
お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、
お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、
お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、
お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、
お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、
お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、
お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、

丁酉三月廿二日 妙由大寺川

お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、

十月廿二日

又

白水文

○
お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、
お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、
お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、
お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、
お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、
お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、
お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、
お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、お尋ねの事にて、

綱代民教の事

梅のふりり花やうの木は梅の花
ひの枝のうしろを花をうしろにさしよる木をうしろに

廿一

花梅夫

花梅夫



空を飛ぶ鳥の信をうしろにさしよる鳥をうしろに
ひの枝のうしろにさしよる鳥をうしろに
鳥の信をうしろにさしよる鳥をうしろに
鳥の信をうしろにさしよる鳥をうしろに
鳥の信をうしろにさしよる鳥をうしろに
鳥の信をうしろにさしよる鳥をうしろに
鳥の信をうしろにさしよる鳥をうしろに
鳥の信をうしろにさしよる鳥をうしろに
鳥の信をうしろにさしよる鳥をうしろに
鳥の信をうしろにさしよる鳥をうしろに

廿一

花梅夫

花梅夫



鳥の信をうしろにさしよる鳥をうしろに
鳥の信をうしろにさしよる鳥をうしろに
鳥の信をうしろにさしよる鳥をうしろに
鳥の信をうしろにさしよる鳥をうしろに
鳥の信をうしろにさしよる鳥をうしろに
鳥の信をうしろにさしよる鳥をうしろに
鳥の信をうしろにさしよる鳥をうしろに
鳥の信をうしろにさしよる鳥をうしろに
鳥の信をうしろにさしよる鳥をうしろに
鳥の信をうしろにさしよる鳥をうしろに

花梅夫

花梅夫

六月廿

秋三ノ振

楓喜

○
 ありし四月の才、又とあて下りて先大坂、和をとりてさの
 省ありし時

夏方の月、中しの心、むね連、ふくむらん、きぬ遠、おき
 久く伊賀、運る、おぼゆる、ふか、きぬ、おぼゆる、おぼゆる、
 っ、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、
 中より、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、
 下り、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、

一 拙名、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、
 くらし、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、

手まり、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、
 八、伊賀、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、
 半方、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、
 下り、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、

馬の毛やあはる、古ふ、佛、花

きく、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、

びん、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、

い、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、
 おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、
 おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、
 おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、
 おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、おぼゆる、

不勤坂 小畑坂

山崎六ツ 玉尺山 安原嶽 吉野山 三ツのいっ峰

猪尾方山 金部方山

此の傍の敷川の敷名をいへぬ山くハキヨクハ

卯月廿五日

万葉 枕書

七七様



寛仁二葉の頃たけふの山をわたりてはたきしんかまは
よりと念たふを

その中へ風は風は佳きよしと物ほすは宗平と好ま上
来るまへしと宗平といふとまへしと大長と新珠重く

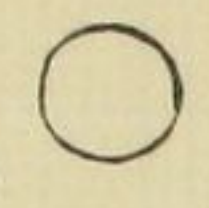
ウチ箱くしし柳をあらはしつりすのすくまはの山崎を末下野 手こ
みしと宗平のすくまを路く大井川の舟をいひ候ふと河内を

振首尾山と宗平の流ぬくしとまへしと大長といひし

丑月廿日

枕書

七七様



一 伴と宗平の當年の暮あふりつりし骨折の面清くはれ

有しふそ是れなりと路くは二人のまのまへと十方をいへし

うろく入るはあまをたれしと山崎の山をたれし言はし

一 好む初光景の懇切生か死に存難し

一 宗平危難の物情ふとつりて面上にれりし跡をいふ

なり

一 支那の起り... 越え...
 一 柳... 再... 冊... 草子...
 一 什... 冊... 一... 一...

元禄七年十月

一 支... 切... 一... 一... 一...
 一 別... 一... 一...

大... 一...

支... 一... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一... 一...

送物完

一 三日月

何...

一 菅白書本

同所

一 埋木

半...

一 新式書入

是ハ... 一... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一... 一...

一 又...

右ハ... 一... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一... 一...

○

一 羽... 一... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一... 一...

古今の序傳百人一冊秘抄見は支那の可なり
元禄七年十月日
久松 誠

○
先づうきと身跡念ふまは過るむ如くおもふ
年におまひの物に臨終の可なり
此の序傳を先を付しめ
十月十日

十月十日

松尾半平の序

新築八津の骨は折れぬ

松尾

俳諧一葉集句合評之部

古學庵 仙号 編
幻窓 湖中
坎窩 久臧 校

小虫ははらばらの枝やしん
下はたのひんはし
此の右に
二十箇
貝地

散りて毛物に直ぬるに多し奈はくは神守の口は小くこゝろ
 こゝろさききききききききききききききききききききききき
 とくおぼん神のやうにのむけききききききききききききき

寛文十二年四月廿五日伊賀上野松尾氏宗房
 約月折しきききききききききききききききききききききき

貝おぼん

三十番仇討合

松尾氏宗房撰

一番

左勝

あけいりきや物落ちききききききききききききき

二本

右

春の影やあきくちやすききききききききききききき

三本

春の影やあきくちやすききききききききききききき
 受けり 右も又春の影は物あききききききききききききき
 二番

紅梅はほろろやゆのひらんふくる

左勝

此男子

只分り梅をこのちや火休く

右

蛇足

左の赤いふらふら大坂のやぶの若菜とてふ小島
なれぬく一 右梅を又ふらふらむ火梅をむのには
寺戸より付ぬる其らうさつに梅の若菜とめいひ火梅の若
白く火付の今ごろはれぬる若菜とてふの耳とわ
とくたのえん徳の趣向とてふふあ徳とてふの左の若菜
めし家ゆはひえ身ひらうらうたを以て勝
三巻

左

なりあやひく物あのはしむひき

右勝

六段節

数りすむらうひすれくやお竹や 哉也

左物あやひく物あのはしむひき
さうらひはさくさくさくさくさくさくさくさくさく
藤子まゆいふらうて葉の茂るをほくさくさくさく
百姓の納米よくさけさくさくさくさくさくさくさく
伊書

左

伝条母

さうらひのあはれんさくさくさく

右勝

和正

あはれんさくさくさくさくさくさく

むく夫の屋敷のりきせえぬるぬのりき
みくくくくくくくくくくくくくくくく
ぬのりきぬのりきぬのりきぬのりき

七者
左拵
たぐりよまんかろくまあろくハハハ

半庵尼

右
まほろろろろろろろろろろろろろろ

竹系母

ろろろろろろろろろろろろろろろろ
ろろろろろろろろろろろろろろろろ
ろろろろろろろろろろろろろろろろ
ろろろろろろろろろろろろろろろろ
ろろろろろろろろろろろろろろろろ

八者

左拵

くくくくくくくくくくくくくくくく

柳色

右

折琴子

くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく

左勝

瑞くきつ多やちふし花のえん

宿節

右

きくく尺く甚く雨おん心ころと

宗房

左花の枝をらふくは失るゆえに海に他他のおくも
いふはしあふ存の甚くおちりまき尺く宗房のや
とまふれは一向は住まこくほやうと紫のさる
ふらふらにゆふに更々のふげんやうそ上はの
強のとくめはあはれ甚くゆふらにゆふらて
たけさく侍りふ

十番

左持

ゆきまけあはんつふかのまきも

政定

右

ゆきまわ山の尾をハまきやうめ

和久

左八日平陸の冬考の桐とまのいふう白の波ハよ親の
なうととく尺く侍りふ
おののハやまきこれおつわのあぐんしりやれき
あはれはなひひけしんのあはれいふ少おれお
考のまやとけくくいふよからすけをえさめ
ゆいぬえくくまきこれおおまめ

十一番

左勝

時き答くくゆきふらんまき

吉之

ふきつゝねへんはねた故きを正 義正

たのり本まゝむすめとふすしきよもを致し
てまもるゝ白のますゝむき行ししはあめもの
んしね

あつりあせんしんしんしんしんしんしんしん
かめの本まゝさひひふれしを上本受のむすめふ
まゝゝねゝねむすめむすめむすめむすめむすめ
おのまねのしんしんしんしんしんしんしん

十何おも

左 お

かゝやれ小春あまきの織とりの経

右

膝云

扇もやあし 風々次々 廿八

左ハかの羽を印し織まをこり織まのいしきふらま
を振こ

右の白折きさゝろく次しきしんしんしんしんしんしんしん
しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん
しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん
のあまめむすめの基本織のみくま骨とまをこれハ扇有力
はからかけぬくおまおまおまおまおま

左 お

すゝねへんはねた故きを正 真好

右

はねをよめりて有れぬのうけ

指盛子

たらのしのしつとを伊とてあはれなるはすゝぬの
あみ目とやあらうらうらうとわづらへりて

ぬとまゝの金に踊り物をもてあはれなるをたをぬ
んてさらばききとやぬきぬらあはれなるをたをぬ
十の音

左勝

行孝母

月の舟やあはれなるをたをぬ

右

三子

月の舟やあはれなるをたをぬ

たのむらうはのむの書字むて寺のたをぬらあはれなるをたをぬ
あはれなるをたをぬらあはれなるをたをぬ
光明遍照十方世界

のま中人とてあはれなるをたをぬ

あはれなるをたをぬらあはれなるをたをぬ
あはれなるをたをぬらあはれなるをたをぬ
踊の小あまのたをぬらあはれなるをたをぬ
鬼のまゝのたをぬらあはれなるをたをぬ
船面つらうたをぬらあはれなるをたをぬ
十七の音

左

吉之

あはれなるをたをぬらあはれなるをたをぬ

右勝

常新

あはれなるをたをぬらあはれなるをたをぬ

左伊勢はか玉あはれなるをたをぬ
あはれなるをたをぬらあはれなるをたをぬ

二十七年

左 右

こゝろちかへりしめけりおつて

勝云

右

こゝろちかへりしめけりおつて

珠次

こゝろちかへりしめけりおつて
くゞりしめけりしめけりおつて
こゝろちかへりしめけりおつて

こゝろちかへりしめけりおつて
くゞりしめけりしめけりおつて
こゝろちかへりしめけりおつて

こゝろちかへりしめけりおつて
くゞりしめけりしめけりおつて
こゝろちかへりしめけりおつて

二十七年

左

こゝろちかへりしめけりおつて

左云

右 勝

こゝろちかへりしめけりおつて

義正

こゝろちかへりしめけりおつて
くゞりしめけりしめけりおつて
こゝろちかへりしめけりおつて

三十番

左 勝

大の珍やいきらびきやどんの神と糸

此男子

右

おなやそくみの出と神と糸

一友

たのみの神のひまわりと人地のるふあやういさくらび社
檀とくことおゆ社のおやざさんとゆきんほくふく未社の不
くはなやしやういさくらびとくふかやけしきんこう
くはなやしやういさくらびとくふかやけしきんこう

おめをういさくらびとくふかやけしきんこう
まけの上のかけしきんこう
おのわりのふまきしきんこう

枕の柳とさかきあふらとくふかやけしきんこう
情杜子とちやき山若とくふかやけしきんこう
糸のうの山の花のういさくらびとくふかやけしきんこう
おなやそくみの出と神と糸
おのわりのふまきしきんこう
おめをういさくらびとくふかやけしきんこう
まけの上のかけしきんこう
おのわりのふまきしきんこう

長寛八歳次

庚申仲秋日

尾亭法師作

田舎之句合

才一首

左 右

雲消く百々をくくくくくくくくくく

新中の農夫

右

かまの野人

菜摘をし白魚をとり川に放りて

先年のうらまを流の二りてえくくくくくくくくくく
まて初めの所をぬくもやうてゆりくくくくくくくくくく
きを記しきくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
使ふふくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
新ひくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
才二首

評

七

左 膳

農人

喜の水やのろく能書ののまをけん

右

野人

引うまの暮もささのりまの 弱

若くもささのりまのい水きくしとあひむの波の文義

之う石する様暮る自叙帖のまのりささくくくくく右

此の端すささささ

中三

左 指

農人

木の榎のけろくまうのり

右

野人

まの榎の榎端はさささささ

たぬの山約比のりくまうのり山の山管の烟雨二青も
レカレニ黄ニ十又ト他も榎の結り似る女体つよ
優り又榎つよふかしのりまのりまのりまのりまのり
とささく又つよのりまのりまのりまのりまのりまのり
もささくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

左

農人

肉の末つよと古里やおも

右 膳

野人

くあふスルニ食の家うらな自り
張海子物つよのりまのりまのりまのりまのりまのり
左のりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり

そととて批言の批もそととて

中五

左 拈

地利程人ひくや花あふく

右

梅香もあそ目足ぬきくさ

地利もいさか花にほくく狂人深印し又目足ぬきの

巻のさくくさやう上野管中の梅も久世盤くく作

下巻のわらわらふらふあふ遊言差あふ

中六

左

何よりいさかあふくく

農丈

右 拈

高きうきくまをいさかくく白やわ

対人

喚子も予先手吟えきくくくひまをきつれハ侍

受の事能世りきんもさくわのくくくくくくくくく

く姑獲もきくくくくくくくくくくくくくく

於拈あふくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

中七

左

今よりかきく淨瑠璃版のきすこれ

農丈

右 拈

何とくく羽織緒綱ハきくくくくく

対人

まを道よくとすけぬらむ 又相好 宝より持るは中唐
の中を月ひしてまらふとく 通才寺の人は若の関白と
すんのきふよふとくねらふ 仍以ま相識を結く定信の
才ハく

左 勝

忠 又

隆カしく 勢破 経くまきし 寺の戸々

右

忠 人

時き 家海のうそや きりしけ

字の度の花の念佛先 殊勝を海のうそとんわくさ
あつと 経くし かつおとく きのひまふ 好くきりしけ
とくあつと ぶつや 法やとく けしきとく 月ひんか
との 経のきりし けしきとく けしきとく けしきとく

可ナラコヤ

才丸く

左 拈

忠 又

登の麦 春ふまを けしきとく

右

忠 人

招 法ゆふ 苗 種く 如 日 秋く けしきとく

登を中する 麦ハ 初苗の 喉 勢を けしきとく 冥雲 大 椿も 海を
うそ 似らう 又 招 法の子 苗の 秋 やり せし かの 二 葉 吹く とき
けしき 風 へ けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき
けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき けしき

才十く

左

忠 又

薄の花や海をこらう袖をきられ浪

右勝

世人

何をもききしすほん写らんよ月雨闇

薄の糸のいよふとねふふふの織らふけき流しく

きほくしぬのちの川城のきぬ田舎の文やを何ぞ許け

ふほろ写すよふのけらふふふのけらふふふのけらふふふの

糸よききく遊ん

中十一

左拵

世人

むりうふふ花をく穿てく陳皮さく

右

世人

改き火よりふくは白しむらゝ

枝子やわかれけりよふかぬるる若葉木の緑青くこころうら

はまうとこころふぬ又かやの橙の力を朗くたつたるほの白

く咲く柳を干れ橙のこころを又かきく又かきく又かきく

中十二

左

世人

石の枕子鏡を金つらゝ今のまを金

右勝

世人

芝物の涼しき若葉のまをたんと思ふ

石の枕古ふゆい草布のまを厚の柳葉の千代らやの山家

とや且芝草のまをたかのかのまの能石より御あらし御

きさのふむらりせひやまを人涼

中十三

左脇

神のちかしく胸二重をうへおめものこ

忠人

右

骨くましく顔骨踊る霧のきり

忠人

胸二重の神のちかしく人の心ゆく秋をふくむゆめつきのこころ
おめものこころをうへおめものこころをうへおめものこころをうへ
おめものこころをうへおめものこころをうへおめものこころをうへ
おめものこころをうへおめものこころをうへおめものこころをうへ

才十四

左脇

月のささくつきの舟の舟の山市川武

忠人

右

さして葉の戸は波の戸をうへおめものこころをうへ

忠人

公任卿の舟をうへおめものこころをうへおめものこころをうへ
川武の舟をうへおめものこころをうへおめものこころをうへ
吉本の板戸をうへおめものこころをうへおめものこころをうへ
おめものこころをうへおめものこころをうへおめものこころをうへ

才十五

左脇

船のついで函管やうへおめものこころをうへ

忠人

右

ま方以信行船いけり波戸の海

忠人

函管関の扉を
おめものこころをうへおめものこころをうへ

おめものこころをうへ

才十六

左勝

分限者予未くハ秋の夕暮をて控ふ

忠又

右

忠人

秋の心法少ハ候ハ高見

先年の白秋法少の宿見候予之んしむきまは
やあり翁くも仍て大福山ま城まの和南ま
同フ着ラ候予の事考く候すも予あ九一孫を
めん精のこく女君をすも仍て右の白閑に入

才十七

左

忠又

破の町暮れく大町く候あり

右勝

忠人

芋を植く向をみ候ハヤリ

右の白里の破く候んハ古くし破の町く之事あて麻
ハ破く候んハ事考く候すも予あ九一孫を
めん精のこく女君をすも仍て右の白閑に入
くきハ昔候心考く候すも予あ九一孫を
めん精のこく女君をすも仍て右の白閑に入
おノ和月昔色並く候すも予あ九一孫を
めん精のこく女君をすも仍て右の白閑に入

才十八

左勝

忠又

白の里の破く候んハ古くし破の町く之事あて麻

右

忠人

紀伊行山をみん候ハ

露をてらふと能きしこふく草の甘きとくく
丸のりハ作享子く句

多しの色や利休の目もよみかたに能きとくく
似よふくや強く必きぬん廿九本おの能きとくく
竹のよ甘きの一滴も余のちけをいふれとくく

廿十九

左

忠又

おる夜松木の物干しとくく

右膝

外人

木くくくくあくぬ増牛のせせ目

わき三折の秋みよのふハをくくかひとくく
えさくく増牛のくつさ貝くくくくかぬくく用の

上りゆくそとへおれぬとくく

廿二十一

左お

のこ

をい庄のわのれとくく

右

や人

あしをきくいく物何しとくく

降山のくくくわのせとくくかたの鶴の鳴くく
けきくわとくくくくやある目とくくく

廿二十二

左お

鬼又

俊子能く一燈のあきき味とくく

右

外人

火煙のしるしおやきりしききとて焚き

口切のしるしつりつり焚きしききとて焚き

飯の業いふれつ焚き又火煙のしるしおやきりしききとて焚き

陽氣壯別要候大火燔燭又籍者本味則要配

と以これをもて事候をのゆいしるしおやきりしききとて焚き

とゆい

中二十三

左 村

をわくしるし焚き掛きみえき

右

をわくしるし焚き掛きみえき

とゆいしるし焚き掛きみえき

忠又

忠人

たのけしるし焚き掛きみえき
身一人あきとあれ山里のしるし焚き掛きみえき
さしるし焚き掛きみえき
さしるし焚き掛きみえき

中二十三

左 村

をわくしるし焚き掛きみえき

右

をわくしるし焚き掛きみえき

今頃のしるし焚き掛きみえき
杖松江のかんきえき
おしるし焚き掛きみえき

忠又

忠人

うらとらひてうとまきく用持ゆへ
廿二十四

左 孫

是山家く粉味也

世ん是

果房のめらみそはきりくけり納豆公外

右

家多家くみね

野人

一有取を 味高き 吟を欲くき

紫生葉の森の木くー火ゆれく枯くなる森の林く
から詰めのみそきりへく乾坤を忘れらる 匠士世下
其用切と多みあくー木の白黄家くして其根を後
この作やと昔もあをくよふくはむ志保あくーく

家家の舎より由おれぬのみそを電せんうとまき
廿二十五

左

農丈

河部ふ店おれきりけきりく

右 孫

野人

あうく手の上をきりつくと製は濃持の
店家のぬけを首のこきんよ一白きくーふく手の
巧それちくーに是も影美すくー

桐之齋主 柳青漫 探毫判

鞠のあゝ木井さくらに笑ふ餅もみらもあつそと
とくもまきおの青いこゝに付合ふさき雪の降る
其味のほくまをいれをあま

秋風子

雪齋屋の句合

中一書

左 勝

雪やうきし八百屋の軒子芳し

右

と引と小松の葉北とてあつる由

たのめ芳子八百屋の軒子梅をいれし雪の葉にまき
わらわらつてついですゝもてあつる由の葉にまき
日のねを引とくしついですゝもてあつる由の葉にまき
かゝるゝとてあつる由の葉にまき

中二書

左

くわたりぬ干物の本目とる

右 繕

花よりとれ目くしのまじり紅巻

左 干物の本目とるまじり紅巻

同じくまじり紅巻

りひかしく

牙三番

左 拵

芥とる菊碧潭とるんくこく

右

防体ゆくと吹く青磁漸く巻く

碧潭とる芥とる菊碧潭とるんくこく

こく吹く青磁の吹菊初く

りひかしく

防体ゆくと吹く青磁漸く巻く

碧潭とる芥とる菊碧潭とるんくこく

りひかしく

牙三番

左 拵

くわたりぬ干物の本目とる

右

花よりとれ目くしのまじり紅巻

左 干物の本目とるまじり紅巻

同じくまじり紅巻

右 芥のホもろしきとけしとて取むししとけし
寺司とてとて取むししとけしとて

中より

左 猪

青もろしきとけしとて取むししとけし

右

青もろしきとけしとて取むししとけし
予いれしやかの田舎の先夫の徳うしとて取むししとけし
とて取むししとけしとて取むししとけし
如やとて取むししとけしとて取むししとけし
とて取むししとけしとて取むししとけし
とて取むししとけしとて取むししとけし
とて取むししとけしとて取むししとけし

中より

左

さうしとて取むししとけしとて取むししとけし

右 猪

平大ねとて取むししとけしとて取むししとけし
極うしとて取むししとけしとて取むししとけし
とて取むししとけしとて取むししとけし
とて取むししとけしとて取むししとけし
とて取むししとけしとて取むししとけし
とて取むししとけしとて取むししとけし
とて取むししとけしとて取むししとけし
とて取むししとけしとて取むししとけし

中より

左

蟻のり業塚のほろろ子ヒコづ

右勝

宿話の子手融れ山は松本丸

むろく昔の住みきつひの洞子ねくまて取し又融れ山の
くこの大木をよそを流るるもあしは山つらきあやや山海
深きくえしゆも一先何ぞし郷度莫の野上はききくも
あや彼大橋をねきくもいかにしとていかにれくうとの大木
又あやし

左

柳の節をよそあや花と社とこれ花

右勝

新人山掛をよそあや花と社とこれ花

花柳のうやうやをよそあや花と社とこれ花
くこの大木をよそを流るるもあしは山つらきあやや山海
深きくえしゆも一先何ぞし郷度莫の野上はききくも
あや彼大橋をねきくもいかにしとていかにれくうとの大木
又あやし

才九

左

又いつい田 雨 社 能 守 狩 巨

右勝

青飯やさうハ音はあやうく
たのこののたおしひしとあやうく
きく慰あつらきと無えしゆのたれしと音のたれしと
又あやし

才十

右

とるの枝折れをくく猫をくくはひりり
後ろよりとまひぬのちをたなをゆききりか
遍昭く何うもをきりりゆききりゆききり又
舟の管仲やきりりゆききりゆききりゆききり
とるくくくくくくくくくくくくくくくく

才十三

左 勝

とくくくくくくくくくくくくくくくく

右

新うくくくくくくくくくくくくくくくく

右 本本のくくくくくくくくくくくくくくくく

とくくくくくくくくくくくくくくくく
ゆききりゆききりゆききりゆききり
やききりゆききりゆききりゆききり
やききりゆききりゆききりゆききり

才十四

左

古くはやくくくくくくくくくくくく

右 勝

和歌のくくくくくくくくくくくく
ゆききりゆききりゆききりゆききり
ゆききりゆききりゆききりゆききり
ゆききりゆききりゆききりゆききり

才十五

左

里芋の長うり畠中一此は月とやらんハ

右勝

美ハ山くうらつてを捨降子自然生

里芋無きて之を以て山の裏自然生是預生の字の如く
んてハうらつてを捨降子自然生不木の類もしんて
すしきうそ上と文字力ありて一向くうらつてを捨降子

中十六

右勝

系信自身をくうらつてを捨降子の類はくうらつてを捨降子

右

礼儀の信尺くうらつてを捨降子の類はくうらつてを捨降子

たの五文字先攻守ありて現子とて梅子の精やとて見出し
かの大根を食へる者も此の類なりとてやれぬの破戒の信を
いれりあし未本柚一のせをうけ焦熱の苦みまの味
情の登うけしるぬ一やとおそるくく味系信の信了
殊勝子おやの信れ

中十七

左勝

暮山の雨 松茸のすこくうらつてを捨降子

右

岩もろくも木くうらつてを捨降子とて
志すくも海苔山の向うぬれく松茸のすこくうらつて
けしきくも海苔の向うぬれく味涼くぬのすこく一休もろくも

つたれども木々けの耳とあひて思ふは、のちたし
もくしつらさる

才十八

左 勝

ふんしを密柑と名柑のちて曰

右

水又粟こを信しとんよんれハ

柑を密柑全柑の論ハ柑の中と信すハ、中上宮とんく
り、数白の中の多逸け白は、以て果園の心ゆんむ味ま
し、多渡粟の白ハ粟の心水を信しとんよんれハ
付れども、心ゆんむて、定年ハ、定年ハ、方とんよんむ
たのむとて、以て類ひ、定年ハ、定年ハ

才十九

左

つたれども、干瓢のちて思ふは、

右 勝

いんし、赤やのし、干瓢のちて思ふは、

ひささし、干瓢のちて思ふは、
ころふれ、干瓢のちて思ふは、
のひり、干瓢のちて思ふは、
くし、干瓢のちて思ふは、
尺三、干瓢のちて思ふは、

才二十

左 勝

お新儀の音昆布おらなをわすしとわぬ

右

山古の身 袖豆千四まうつわあし

たの白飯妻杉葉のあしうに昆布を以てなをいひてあしとわ
あしをぬきしとらをもお新儀の音昆布のきしきしにきしきし
さしきしにきしきしにきしきしにきしきしにきしきしにきしきし
の昆布をいひてあしとわぬ

中二十一

左 膝

木うらしとわぬ千はうらたわぬとらうらしとわぬ

右

お新儀の音昆布おらなをわすしとわぬ

さしきしにきしきしにきしきしにきしきしにきしきしにきしきし
お新儀の音昆布おらなをわすしとわぬ

中二十二

左 膝

さしきしにきしきしにきしきしにきしきしにきしきしにきしきし

右

さしきしにきしきしにきしきしにきしきしにきしきしにきしきし

さしきしにきしきしにきしきしにきしきしにきしきしにきしきし
お新儀の音昆布おらなをわすしとわぬ

中二十三

左勝

鉄よりふすものそ性よとめく物と

右

水節のそーかんてんのかんハきイとよ玉

製ハ性ヲ註シカンテンハ文字ヲトク増補献立抄ニ曰ク製ハ風
末ノ切以酒煮以油煎則味愈厚シト云リ此方賞翫タルヘシ

才二十四

左 右

大根生る逆あつゝをうーいゝや人し

右

空のみ菜男 嫩作りしきりき

たのひあつゝろろ屋の将こけさる大根をわきしあし

ちの中北田園三修しーあひる作又取寄
才二十五

左 右

空の竹子今ハ塩しーろろのた

右

豚力此ま物系ききききききき

毛の毛字空の中のは何何ハあつゝやとをうーあきり
蠟月の青物ハ何やまのまをゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

あまころり

評
評をほろろ魏子いーあきり四百の事河人才子文評
あまころりあまの代こけさる大根をわきしあし

愛一内々に新なる今々に其物の行くも集り二十五
 此句分と新しき事、新なる今々に其物の行くも集り二十五
 一く尺さし進みし思ふに言ぬる是を今に風物といふ
 且つれり古きと今とを思ふに言ぬる是を今に風物といふ
 なるべし一情分は同好のけしむるおもひは思ふの
 其字ハ麒麟一つけは是を今に風物といふ
 字の中は其字ハ二月の如瓜の解の紫入春みさうと
 后の如し一の如きと今に風物といふ
 まじりの如きと今に風物といふ
 此物之如きと今に風物といふ
 新に其の如きと今に風物といふ
 此物之如きと今に風物といふ

かきみ瓜

于对延寛八庚申季秋日

善桃園

讀の糸

判者四人

春 夏 秋 冬

素堂 調和 湖春 桃青

四季之句合

撰者

不卜 才丸 其角

一書

左 拈 落葉 風水

右

落葉とて富士の峰より塔の山 松濤
左の白雲金嶽廻り心をもけり又山と河とを好ま
二の海の一ののけり地とてはつるさねとては白中園
尺のくちやれ 五文字のしと結し 九のまねのちを加へ
尺のくちやれ 五文字のしと結し 九のまねのちを加へ

二書 した 膳 色紙

親と子供をねむるをかくみせしる 三子 溪石

左 枅 細代

子をまきく花はゆりしるす羨きはし 心水

右

ゆりしる木のゆきふやまぬかうれ 不角

あしらの庭子子をまきく化意めつるこやこ

ゆ又ゆりしの枝のゆきしらるるまきく花すくけき

凡れ慈心まきく

六 智

左 豚 石景

竹れ紫花はゆきく 丸くう 融のまき 細柳

右

はく咲や後引まきく 空身ゆゆ 立此

たのむゆらまきくゆきく 尺おそくまきくゆきく
まのゆきくゆきくゆきくゆきくゆきくゆきく
木の白きまきくゆきくゆきくゆきくゆきく

七 高

左 豚 鴨

新野のあしゆりまきくゆきく 月定 尻雪

右

鴨くくまきく平枯す 塔屋うれ 魚次

すうまのあしゆりまきくゆきくゆきくゆきくゆきく

高定のけしきまきくゆきくゆきくゆきくゆきく

甲のりまきくゆきくゆきくゆきくゆきくゆきく

ものきぬまきくゆきくゆきくゆきくゆきくゆきく

あつて細かきしとわさん

八音

左 水柱

風平末く水柱千 さう 楓のふ 一掛

右 勝

門開く 宝后を 一ゆつ 水柱 止 碧風

水柱千さう 楓のふの けし けし けし けし けし けし けし けし けし けし

九音 楓のふの けし けし けし けし けし けし けし けし けし けし

宝后の 庭 其 陰 せき けし けし けし けし けし けし けし けし けし けし

九音

左 拵 けし けし

けし けし けし の 姿 是 其 けし けし けし けし けし けし けし けし けし けし

李二

右

葉 涼く せき 飛 けし けし けし けし けし けし けし けし けし けし 仲 風

起 風 平 威 峻 の 霜 受 けし けし けし けし けし けし けし けし けし けし けし けし けし けし けし けし

けし けし

けし けし

けし けし

けし けし

十音

左 勝 けし けし

けし けし

右

けし けし

孤屋

ちのひささき 敵やれく 兵さるる 兵さるる
九、陣さるる 陣さるる 兵さるる 兵さるる
兵さるる 兵さるる 兵さるる 兵さるる

十一番

左 勝 敗中

山屋や 敗中とく 不人とも

京 観水

右

敗中きぬ 敗中きぬ 敗中きぬ 敗中きぬ
敗中きぬ 敗中きぬ 敗中きぬ 敗中きぬ
敗中きぬ 敗中きぬ 敗中きぬ 敗中きぬ
敗中きぬ 敗中きぬ 敗中きぬ 敗中きぬ

十二番

左 煤掃

何すやい 何すやい 何すやい 何すやい
何すやい 何すやい 何すやい 何すやい

右 勝

煤とく 煤とく 煤とく 煤とく
煤とく 煤とく 煤とく 煤とく

煤とく 煤とく 煤とく 煤とく
煤とく 煤とく 煤とく 煤とく
煤とく 煤とく 煤とく 煤とく
煤とく 煤とく 煤とく 煤とく

一物将不トのぬ 一物将不トのぬ
一物将不トのぬ 一物将不トのぬ
一物将不トのぬ 一物将不トのぬ
一物将不トのぬ 一物将不トのぬ

